

鳥取県八頭郡郡家町

花原遺跡群・山ノ上古墳群
発掘調査概要報告書

1992.3

郡家町教育委員会

花原遺跡群・山ノ上古墳群 発掘調査概要報告書

1992

郡家町教育委員会

序 文

この発掘調査報告書は、平成3年度の国庫補助事業として実施した本町花原地内並びに山ノ上地内の調査記録です。

郡家町内には数多くの遺跡が存在しておりますが、近年、各種開発関連事業の増加とともに発掘調査は漸増の状況にあります。埋蔵文化財は貴重な歴史資料として、いろいろな情報を提供するばかりでなく、各種、生活の知恵をも現代人に与えてくれるものがあります。今日、開発と文化財の共存は地域文化の発展にとって、年をおって重要な課題ともなっています。郡家町教育委員会では、このような認識にもとづき、関係各機関との協議を重ね、また地元町民のご理解をいただきながら、地域の発展と文化財の共存を図るよう、文化財保護行政を進めているところであります。

今回の発掘調査も関係各位のご協力によって、無事所期の目的をはたしました。厚く御礼を申しあげる次第でございます。

平成4年3月

郡家町教育委員会

教育長 北村一利

例　　言

1. 本書は、平成3年度に国、県の補助金を得て郡家町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 今回、調査を行なった遺跡は、鳥取県八頭郡郡家町花原地内と同町山ノ上地内に所在する。
3. 本書に用いた方位は、遺跡分布図は真北を示し、その他は磁北を示す。
4. 遺構名の略号は、SDは溝状遺構、SXは埋葬施設、Pは柱穴を表す。またTはトレンチ略号である。
5. トレッヂ実測図中の遺物出土地点に付した番号は、遺物実測図の遺物番号に対応する。
6. 遺物実測図のスケールは $\frac{1}{50}$ である。
7. 本書の執筆・編集は、花原地区を若林久雄、山ノ上地区を中野知照が行なった。また、整理作業の全般にわたって上田昌彦の協力を得た。
8. 発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は、郡家町教育委員会に保管されている。
9. 発掘調査の体制は、下記のとおりである。

発掘調査主体　郡家町教育委員会　教育長　北村　一利

調査指導　鳥取県教育委員会

事務局　郡家町教育委員会　社会教育課

調査担当者　（花原地区）　若林　久雄

（山ノ上地区）　中野　知照

本文目次

序文	I
序言	II
序節 郡家町の歴史的環境	1
(花原遺跡群)	
I 発掘調査に至る経過	3
II 調査の概要	3
III 小結	13
(山ノ上古墳群)	
I 発掘調査に至る経過	15
II 調査の概要	16
III 小結	40

挿図目次

第1図 群家町遺跡分布図	2
(花原遺跡群)	
第2図 花原遺跡群全体図	5・6
第3図 トレンチ実測図(T1~14)	7・8
第4図 トレンチ実測図(T15~22)	9
第5図 トレンチ実測図(T23~33)	10
第6図 トレンチ実測図(T30)	12
(山ノ上古墳群)	
第7図 工事予定地全体図	15
第8図 試掘トレンチ配置図	17・18
第9図 B区、トレンチ配置図	21
第10図 トレンチ実測図(T9)	22
第11図 D区、トレンチ配置図	23
第12図 E区、トレンチ配置図	24
第13図 トレンチ実測図(T21~23)	26
第14図 第23トレンチ、石棺実測図	27
第15図 トレンチ実測図(T25~28)	28
第16図 トレンチ内出土遺物実測図	29
第17図 F区、トレンチ配置図	30
第18図 第29トレンチ、土器出土状態図	31
第19図 第29トレンチ、出土遺物実測図	32
第20図 H区、トレンチ配置図	33
第21図 J区、トレンチ配置図	33
第22図 トレンチ実測図(T43・44)	35
第23図 トレンチ内出土遺物実測図	36
第24図 K区、トレンチ配置図	37
第25図 トレンチ実測図(T45)	38
第26図 トレンチ実測図(T47)	38
第27図 トレンチ内出土遺物実測図	39

図版目次

(花原遺跡群)

図版1 1. 第44区調査前全景(南より)	2. T・3完掘状態(西より)
3. 第47区調査前全景(南より)	

- 図版2 1. T・4完掘状態(南より)
3. T・6完掘状態(東より)
- 図版3 1. T・10完掘状態(西より)
3. T・12完掘状態(西より)
- 図版4 1. T・14完掘状態(西より)
3. T・15完掘状態(東より)
- 図版5 1. T・18完掘状態(西より)
3. T・21完掘状態(南より)
- 図版6 1. 第57区調査前全景(西より)
3. T・25完掘状態(北より)
- 図版7 1. T・26完掘状態(北より)
3. T・28完掘状態(北より)
- 図版8 1. 第66区調査前全景(北より)
3. T・31完掘状態(南より)
- (山ノ上遺跡群)
- 図版9 1. A区遠景(南より)
3. A区、T・6完掘状態(南より)
- 図版10 1. B区遠景(東より)
3. B区、T・9周溝断面検出状態(南より)
- 図版11 1. D区、T・14周溝検出状態(北東より)
2. D区、T・15周溝断面検出状態(南東より)
3. D区、T・16完掘状態(北より)
- 図版12 1. E区、T・21～T・23全景(北より)
3. E区、T23石棺出土状態(西より)
- 図版13 1. F区、T・29周溝内土器出土状態(東より)
2. F区、T・29周溝内土器出土状態(北より)
3. H区、T・39周溝検出状態(西より)
- 図版14 1. I区、T・40竖穴住居状遺構検出状態(西より)
2. I区、T・40竖穴住居状遺構検出状態(東より)
3. J区全景(北東より)
- 図版15 1. K区遠景(東より)
3. K区、T・45柱穴検出状態(北より)
2. T・5完掘状態(東より)
4. 第51・52区調査前全景(西側斜面・東より)
2. T・11完掘状態(西より)
4. T・13完掘状態(北より)
2. T・17完掘状態(西より)
2. 第54区調査前全景(南側斜面・南より)
2. T・24完掘状態(北より)
2. T・27完掘状態(西より)
4. T・29完掘状態(西より)
2. T・30完掘状態(北より)
4. T・32完掘状態(南より)
2. A区、T・4完掘状態(南より)
4. A区、T・8完掘状態(東より)
2. C区遠景(東より)
4. B区、T・9周溝検出状態(東より)
4. D区、T・16周溝断面検出状態(東より)
2. E区、T・21周溝検出状態(東より)
4. E区、T21土器出土状態(南より)
4. H区、T・39土坑検出状態(西より)
4. J区、T・43完掘状態(北東より)
2. K区、T・45柱穴検出状態(南より)

插 表 目 次

(花原遺跡群)

第1表 試掘トレンチ一覧表

(山ノ上古墳群)

第2表 試掘トレンチ一覧表

序 節 郡家町の歴史的環境

郡家町は、鳥取県東部の最大河川である千代川に流入する八東川と私都川に挟まれた流域に位置する。北側は鳥取市と国府町に接し、西側は河原町、南側は船岡町と八東町、東側は兵庫県美方町に隣接する。町内の東端には、私都川が源を発する扇ノ山が立地する。

今回、調査を行なった花原遺跡群、山ノ上古墳群は、私都川流域に所在している。私都川は町内の北側を西方に流下した後、南西に流れを変え、八東川に合流して千代川に流れ込んでいる。私都川は、中流域から下流域にかけて比較的広い谷平野を形成しているが、大坪付近で急に開けて南側に砂礫台地をつくっている。上記両遺跡は、この平野が開けてくる南北の丘陵上に位置している。

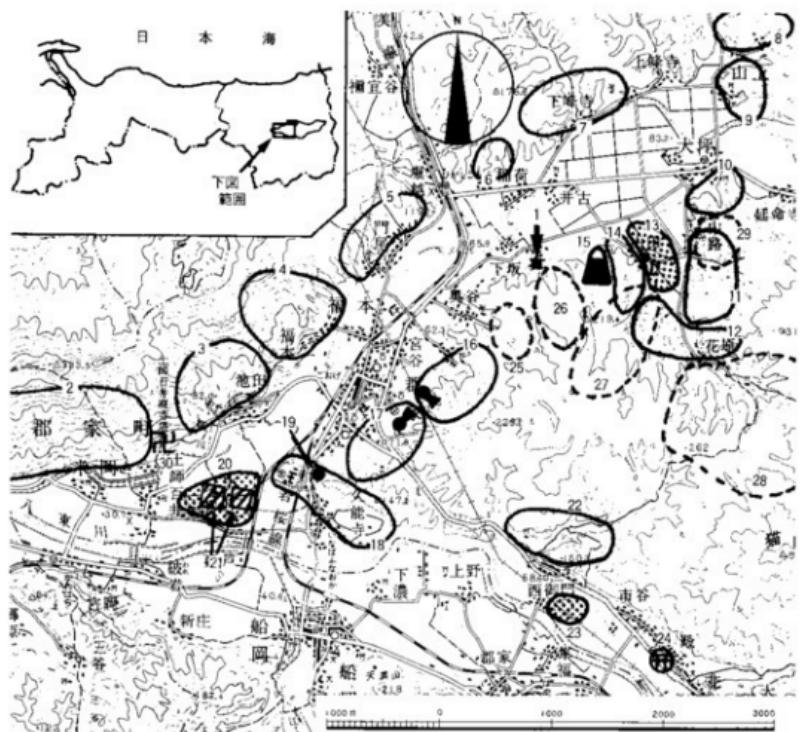
私都川流域は、古くより遺跡の存在が多く知られた地域である。

縄紋時代の遺跡としては、八東川下流域に北面する西御門遺跡や、私都川と八東川に挟まれた段丘上に立地する万代寺遺跡が知られている。これらの遺跡では、石斧や深鉢形土器が出土しており、縄紋時代後期（約3,000～4,000年前）に生活の痕跡がしるされていた。

弥生時代に入ると、私都川下流域に形成された広い谷平野の周辺部に生活の場がみられる。私都川の南側の段丘上あるいは丘陵斜面に、山田遺跡や銅鐸の出土した下坂遺跡、近年発掘調査され木棺墓群が確認された下坂1号墓などが知られる。また、前掲の万代寺遺跡においても木棺墓群の存在が知られている。これら弥生時代の遺跡は、段丘上に展開しており、私都川周辺の肥沃な沖積低地に営んだ水田耕作を生活基盤とした農業集落の広がりが推察される。

古墳時代以降、私都川流域を中心として遺跡の数は増加するが、下坂1号墓に代表される弥生時代後期の墓制に続く古墳時代前期に該当する古墳はみられず、山田遺跡で土器の散布がみられるのみである。古墳時代中期に該当する古墳として御建山古墳、福荷古墳群などが知られ、出土遺物よりみて5世紀末葉から6世紀初頭の年代が考えられている。いずれも私都川下・中流域における盟主墳と思われる。古墳時代後期になると、私都川下・中流域を望む丘陵斜面に古墳の造営が集中してみられる。私都川左岸では、寺山古墳、宮谷1号墳などの約30～40m級の前方後円墳が造られる。私都川両岸の丘陵斜面においては、横穴式石室や石棺を内部主体とする10m前後の円墳が多く造られ、群集墳の形態をなす。これらの群集墳のみられる地域には、寺院跡や官衙跡ならびに窯跡群なども認められている。

郡家町西側の靈石山山麓では、白鳳時代後期の法起寺式伽藍配置をとる土師百井廃寺の存在が知られ、その東方においては掘立柱建物群を検出し、八上郡衙跡と考えられる万代寺遺跡がみられる。また、郡家町の北側に接する国府町には因幡国庁、国分寺、国分尼寺



- | | | | |
|--------------|------------------|----------------|------------|
| 1. 下坂1号墓(赤生) | 11. 山路古墳群 | 21. 八上郡跡 | 31. 温跡、散布地 |
| 2. 米岡古墳群 | 12. 花原古墳群 | 22. 西御門古墳群 | 32. 家跡群 |
| 3. 池田古墳群 | 13. 山田遺跡(弥生～古墳) | 23. 西御門通跡 | 33. 前方後円墳 |
| 4. 福本古墳群 | 14. 山田古墳群 | 24. 和多理神社(式内社) | 34. 式内社 |
| 5. 門尾古墳群 | 15. 下坂通跡(新羅出土地) | 25. 奥谷窯跡群 | 35. 墓跡 |
| 6. 稲荷古墳群 | 16. 宮谷古墳群 | 26. 下坂窯跡群 | 36. 官街遺跡 |
| 7. 下峰寺古墳群 | 17. 那家古墳群 | 27. 山庄窯跡群 | |
| 8. 奥山ノ上古墳群 | 18. 久能寺古墳群 | 28. 花原窯跡群 | |
| 9. 山ノ上古墳群 | 19. 斎建山古墳 | 29. 山路窯跡群 | |
| 10. 大坪古墳群 | 20. 万代寺遺跡(弥生～奈良) | 30. 土師百井窯寺(白鳳) | |

第1図 郡家町遺跡分布図

などがみられ、これらの寺院跡や官衙跡より出土した瓦片・鰐尾片・須恵器雜器・円面鏡などが、私都川流域に散在する窯跡群より供給されていたことが知られている。

山ノ上古墳群の所在する地域は、私都川流域に散在する窯跡群（私都古窯跡群）より、因幡国境方面へ通じる幹道に当たるものと考えられる。西側の上峰寺地区は、花原地区と同様に、御醍醐天皇が伯耆の船上山より京都へ還幸された際に通られた道としての伝承が伝えられている。

花 原 遺 跡 群

I 発掘調査にいたる経過

一般県道大坪隼停車場線特殊改良工事に伴う本年度分布調査は、工事の進捗状況に対応して、既に平成元年度に実施された私都川の高位段丘面に相当する区域から、未施行区域の山地丘陵面、約470mの区間で実施されることになった。

郡家町教育委員会では、現地踏査による遺跡分布図にもとづき、試掘調査によって、遺跡の確認作業を行なうこととし、町教育委員会が主体となって、現地作業に着手した。

調査は、花原字汁谷の谷底最奥部、崖面の精査を行ない、斜面にトレンチを設定して、窯跡の所在の有無、また丘陵部においては、頂部、山腹、緩斜面において古墳、土坑その他遺構の確認につとめた。花原字古峠の谷奥峠部分の窪地は土壘状の盛土によって画されており、この個所の遺構の検出につとめたが、今回の試掘調査においては、遺構の存在を特定することができなかった。

試掘調査は花原窯跡群の発掘調査と並行して実施したため、数次にわたり中断したが、現地作業を12月10日に終了した。整理、報告書作成作業は平成4年1月7日から同20日までに完了した。

II 発掘調査の概要

調査の方法と経過

今回の発掘調査は、平成元年度に実施された区域の南部にあたる花原字汁谷の谷奥部を迂回して北行し、東側尾根を経、さらに丘陵緩斜面を北東に向い、西御門字花原越の境界域にいたる全長約470mの区域で実施された。

本地区は、中国山地を北流して日本海に注ぐ千代川の支流の一つである私都川の左岸流域に位置する。私都川は、流長27km、郡家町の東部、扇ノ山に源流を発し、下流域に別府・延命寺・下私都の谷底平野を形成して、八東川に流れ、その後千代川に合流する。

流域左岸の肥沃な段丘面には山路・花原・山田・下坂・奥谷等の集落があり、中位段丘面の山路・山田の水田下部では、津ノ井粘土に相当すると推定される良質の粘土層が確認されている。

今回、試掘調査の対象となった花原字汁谷地区は、花原窯跡群の一支谷である。調査区域は、猫山の北斜面、標高200m～300mの花原岩体と呼ばれる花崗斑岩類を基盤とする山地で、窯跡の立地する丘陵斜面上の上部稜線上にあたる。

調査の区割りは、前回の調査に準じて、道路センター杭間を一区画とし、今回起点の杭43から杭67までの区間を43～66区として、24調査区とした。調査は43区においては西面す

る崖の精査とトレンチの発掘による窯跡・灰原の確認を主とし、44～46区では柿園整地に伴う著しい土壤攪乱のあとがみられるところから、土質・地形の変化に注意し、盛土状部分にトレンチを設置した。47区では、踏査による分布図にもとづき、古墳の検出を目的としたトレンチを、また、48区から49区までは急斜面と谷底部の表層面の観察につとめ、50区から57区では分布図により、稜線の全面的な発掘を行ない、古墳・土坑等の遺構検出のためのトレンチを設定した。58～62区にあっては山腹斜面の表層観察を行なうとともに遺物の発見に留意し、63～66区は分布図により古墳・土坑等、遺構検出のトレンチを設定して調査を行なった。今回の調査区域は花原部落から比高50～100mの山地に位置し、地形的には花崗岩体の露出する尾根、火山灰土の堆積する山腹等で実施されたが、遺物・遺構等の検出と確認にはいたらなかった。調査区である工事予定区域内での遺跡の存在は考えられない。調査したトレンチについては、土層断面図を作成し、写真撮影を行なった。

トレンチ調査の概要

第1トレンチ（第3図）

花原3号窯の東側対面の崖面を伐開して、法面を切削、トレンチを設定した。表土下10cmで堆積層の赤紫色シルト状粘質土、30cmで明黄褐色泥質土に達する。この泥質土は基盤層と考えられる。須恵器片・灰原・窯体の検出はみられなかった。

第2トレンチ（第3図）

第1トレンチの上方斜面にトレンチを設定して、灰原・窯体の検出を試みたが、検出できなかった。

第3トレンチ（第3図）

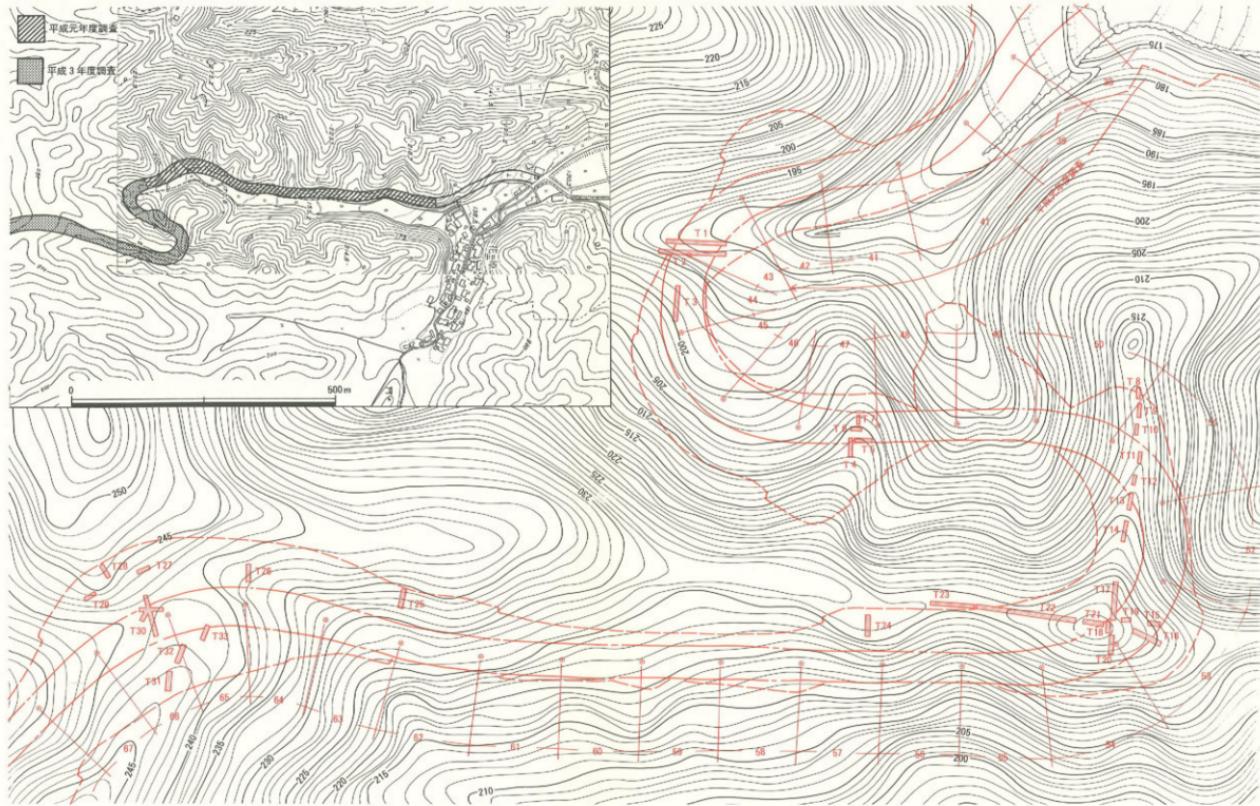
第3トレンチの上部、緩斜面のマウンド状地形に設定したトレンチ。表土下40cmで明黄褐色泥質土層に達する。遺物・遺構の検出はなかった。盛土状を呈していたのは、柿園造成時に局部的に搔き寄せられたものと考えられる。

第4・5・6・7トレンチ（第3図）

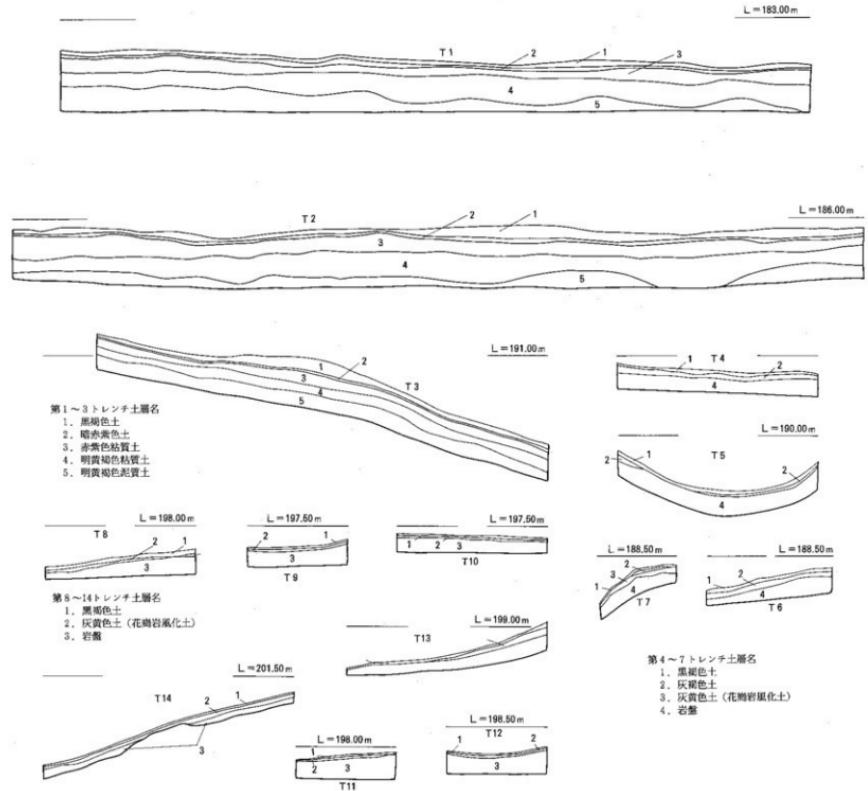
第3トレンチの北東部の南西から北西にのびる尾根の小支脈の先端部に二つコブ状の地形を呈していた部分で、概観状、円墳に酷似する2基の墳丘と想定され、2基を画する凹みは周溝とも考えられたが、地元民によって切削された捷径と言われている。頂部、裾部に設定した4個所のトレンチである。表土下、10cmで基盤の花崗岩に達する。遺物・遺構の検出はされなかった。

第8・9・10・11・12・13・14トレンチ（第3図）

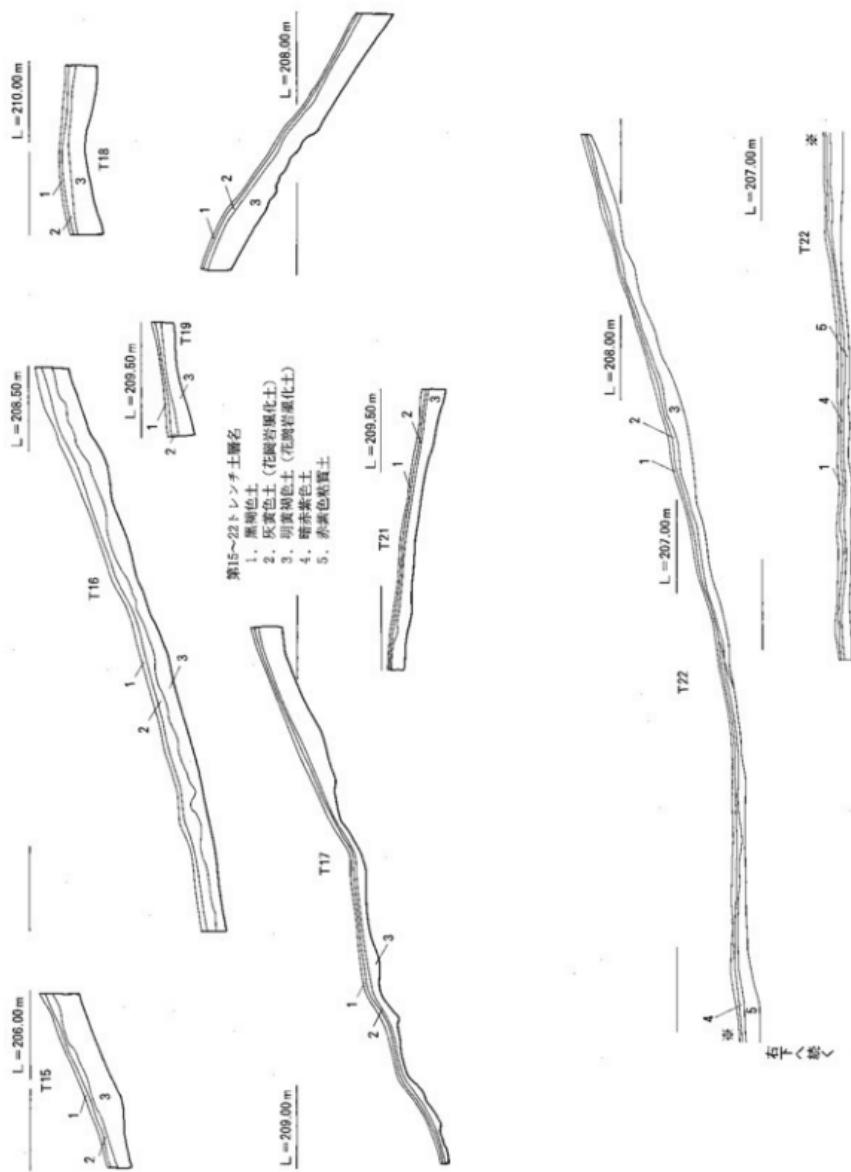
北西に傾斜する尾根上に設定したトレンチ。花崗岩体が露出し、尾根の両側は急傾斜を呈し、表土の流出がはげしい。表層は風化した細砂層で、表土下10cmで基盤岩に覆われている。遺物・遺構の検出はみられなかった。



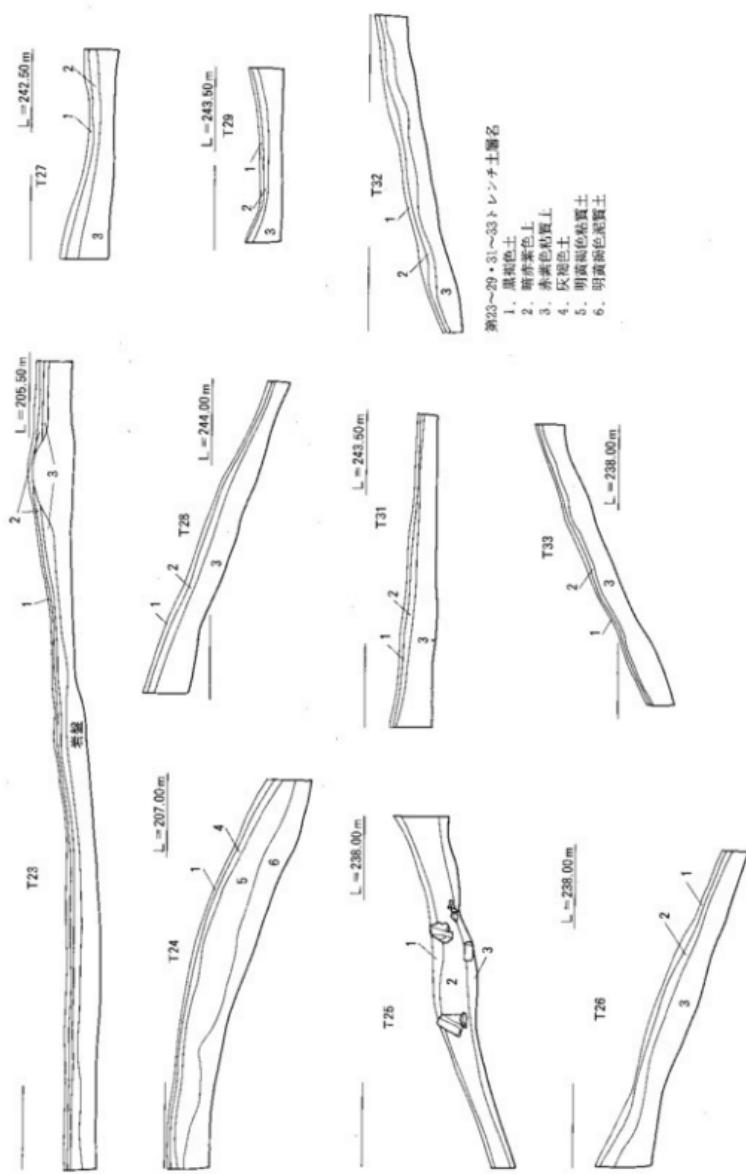
第2図 花原遺跡群全体図



第3図 第1～第14トレンチ工層断面図



第4図 トレチ実測図 (T15~22)



第5図 トレンチ実測図 (T23~33)

第15・16・17・18・19・20・21トレンチ (第4図)

独立丘（標高210m）の頂部、東、西、南、北の中腹と裾部にトレンチを設定した。表土は風化した花崗岩の細砂粒で、從来からの伐採により表層が露出し、急傾斜の地形とあいまって表土の流出がはげしい。表土下、5~10cmで花崗岩体にあたる。墳丘状の地形から遺物・周溝等の遺構の検出につとめたが確認されなかった。

第22トレンチ (第4図)

独立丘の裾部から南へのびる台地に設けたトレンチ。概観上、独立丘と台地状地形が統じて、前方後円墳の形状を想定させるところから試掘を進めたが、遺物・遺構の検出はみられなかった。表土下、5~10cmで基盤の花崗岩および泥質土に達する。

第23・24トレンチ (第5図)

台地状地形の裾部と上部にトレンチを設定。土坑等の遺構・遺物の確認はできなかった。表土の赤紫色粘土質から30cmで明黄褐色泥質土に達する。

第25・26トレンチ (第5図)

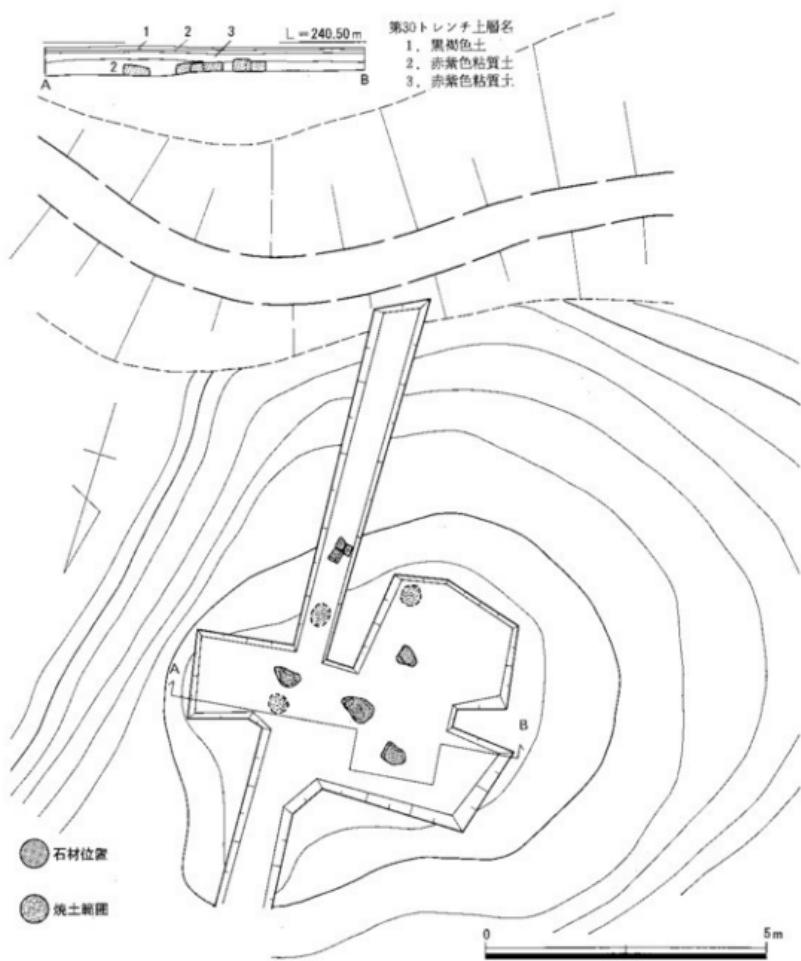
第24トレンチの東方約60mにあたる。赤紫色粘土に覆われた尾根の北東側斜面に設定したトレンチで、小角礫が粘土質に混入した崩落地形である。トレンチの上部で30cm、下部で70cmで明黄褐色泥質土にあたる。遺物・遺構の検出はされなかった。

第27・28・29トレンチ (第5図)

第28トレンチを墳丘上部と想定して南北方向に、両側に周溝部分を考慮して東西方向に第27・29トレンチを掘り進めた。崩落地形で角礫が混入し、10~30cmで泥質土に達する。遺物・遺構の検出はなかった。

第30トレンチ (第6図)

今回発掘調査の終点区間に位置し、私都谷の花原部落から八束谷西御門へ越す里道の峠部分の窪地にあたる。当初、伐開により峠の東西方向に比高2mの傍示境を画する盛土が発見され、さらに東西5m、南北6mの窪地部分があらわれたため、土壘状遺構を想定して、東西、南北にトレンチを設定した。土盛りは東西方向の傍示境のみで、南北方向は表土下10cmで角礫片の混入した赤紫色粘土質の崩落地形にかこまれ、人工による築土状のものは確認できなかった。凹地のほぼ中央部分に平板状石材5個、円形の焼土3個が検出され、建物遺構の存在が考えられたが、建築物に関連する瓦、木材その他土器片等の発見はなく、また石列間隔が定まらず、一定方向に配置されておらず、擣き固めも施工されておらず、また焼土層は径30cm、厚さ2cm程度であるところから、焚火跡とも思われ、これらのことから遺構の存在は特定できない。なお、この個所は山仕事の休憩所として、丸太架けの仮小屋が、明治年間まで利用されていたことが花原部落に語りつがれている。



第6図 トレンチ実測図 (T30)

第31・32トレンチ (第5図)

台地上の削平されたマウンド地形の頂部と裾部にトレンチを設定。表土下、10cmで小角礫を混入した赤紫色粘質土に達する。粘質土は植物片等の混入は肉眼では見られず、攪乱されたあとは認められない。古墳・土坑等遺構・遺物は検出されなかった。

第33トレンチ (第5図)

第33トレンチの下方にあるテラス状の凹地を対象として掘削した。上部から流入した粘質土が堆積しているものの、表土下、15cmで赤紫色粘土にあたる。遺構・遺物の検出はみられなかった。

III 小 結

今回の試掘調査で得られた所見を以下に述べ、まとめとしたい。

今回の調査は、工事予定地内の丘陵上に墳墓の存在が予見されていたため実施されたものであった。トレンチは33本設定され、地形的に高まりがみられる地点を中心に、それぞれ丘陵斜面及び尾根上に位置する。

43・44区は、窯跡の存在が予見された箇所であるが、調査の結果、遺構・遺物は検出されなかった。47区は、古墳状の高まりがみられたが、T 6の東に斜面を掘削した山道が通っている。50~57区は、丘陵尾根上に位置し、若干の高まりが連続していた。表上下5~20で地山面を検出し、遺構・遺物はみられなかった。63~66区に位置するT 25~29はいずれも丘陵東斜面にあり、斜面上方を「U」字形に切削した地形を呈していたが、遺構・遺物は検出されなかった。T 30は、丘陵の鞍部に位置し、周囲を土壘状の高まりをもった窪地に設定されたものである。表土下約10cmで、上面が平坦な石材が検出され5石が認められた。いずれも、上面のレベルはほぼ同一であった。石材は、礎石状を呈するが規則性はみられない。表土下30cmで、焼土・炭を混入した盛土面がみられ、焼土の集中する箇所もみられた。この盛土面は、いわゆる礎石建物の基礎地固めと思われるが、現段階では遺構と特定するには致らなかった。表土中より高台付杯片がみられた。T 31~T 33は小尾根上に位置するが、遺構・遺物は検出されなかった。

今回の調査で以上の所見が得られ、所期の目的は充分達成されたものと思われる。しかしながら、第30トレンチで検出された盛土の性格を判断しえなかつたのは残念であった。調査に際し、発掘調査から報告書作成にいたるまで、多くの方々の協力、御教示を受けた。記して謝意に代えたい。

調査協力 烏取県郡家土木事務所

鳥取県埋蔵文化財センター

作業協力 清水好夫、清水なみ子、田淵美道、大野昌之、大野美佐栄、福田 司、
安部信道、和田政子

第1表 調査トレンチ一覧表（花原地区）

トレンチ番号	大きさ (長さ×幅) 単位(m)	遺構	出土遺物
第1トレンチ	16×1.5	—	—
第2トレンチ	17×1	—	—
第3トレンチ	9×1	—	—
第4トレンチ	4×1	—	—
第5トレンチ	4×1	—	—
第6トレンチ	2.5×0.5	—	—
第7トレンチ	1.5×1	—	—
第8トレンチ	3×1	—	—
第9トレンチ	2×1	—	—
第10トレンチ	3×1	—	—
第11トレンチ	2×1	—	—
第12トレンチ	2×1	—	—
第13トレンチ	4×1	—	—
第14トレンチ	5×1	—	—
第15トレンチ	2.5×0.5	—	—
第16トレンチ	8×0.5	—	—
第17トレンチ	3×0.5	—	—
第18トレンチ	9.5×0.5	—	—
第19トレンチ	2×0.5	—	—
第20トレンチ	4.5×0.5	—	—
第21トレンチ	5×0.5	—	—
第22トレンチ	25.5×1	—	—
第23トレンチ	11.5×1	—	—
第24トレンチ	5.5×1	—	—
第25トレンチ	5×1	—	—
第26トレンチ	4.5×0.5	—	—
第27トレンチ	3×1	—	—
第28トレンチ	4.5×0.5	—	—
第29トレンチ	2.5×1	—	—
第30トレンチ	10×0.6, 5.5×1, 2.3×1	基礎地固め	須恵器片・石材・炭片
第31トレンチ	4.5×1	—	—
第32トレンチ	4.5×1	—	—
第33トレンチ	4×1	—	—

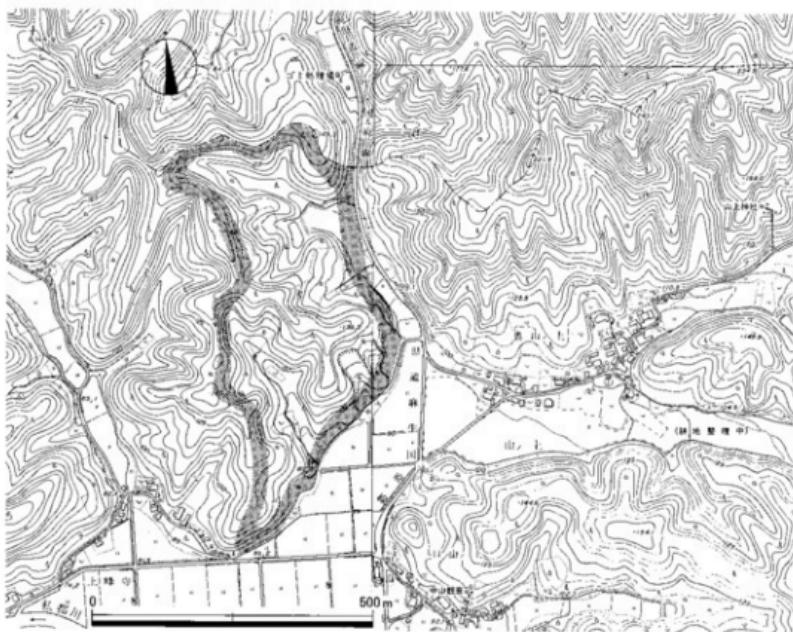
山ノ上古墳群

I 発掘調査に至る経過

山ノ上古墳群は、郡家町の北側を西流する私都川流域の山ノ上地区に所在する。古墳群は、同地区付近を通る県道国府・麻生線を境に東西の丘陵上に立地している。県道の西側の丘陵は未調査であったが、西隣の上峰寺・下峰寺地区ではそれぞれ3基と23基の古墳の存在が知られている。また、北側に隣接する国府町岡益地区においては、彩色壁画で知られる梶山古墳をはじめ、岡益石堂、岡益廃寺や多くの古墳が密集していることは衆知の如くである。

さて、このような環境にある山ノ上地区に郡家町による工業団地開発事業の計画が明らかになった。このため郡家町教育委員会では、事業計画者である町総務課と鳥取県埋蔵文化財センターとの三者による開発予定地の分布調査を行なった。その結果、数基の古墳と遺物散布地を確認した。開発事業計画では、県道西側の丘陵斜面を開発して工場用地を造成するというものである。

開発事業の具体的な計画が知られるところとなり、郡家町教育委員会では、事業計画地



第7図 工事予定地全体図

内の埋蔵文化財についてより詳細な分布状況を把握し、早急に造成工事計画との調整を図る必要性が生じたのである。このため、郡家町教育委員会では、鳥取県教育委員会の指導を得ながら当該地の発掘調査を実施することとなった。発掘調査は郡家町教育委員会が調査主体となり実施した。調査の方法は、開発事業計画を勘案しながら合計50本のトレンチを設定して行ない、発掘調査の総面積は約620m²である。

発掘調査は、平成3年9月9日から伐開、トレンチ掘削等の作業に入った。実測、写真撮影などの作業をへて、同年10月31日までに現地調査を終了した。整理、報告書作成作業は平成4年1月6日より行ない、2月12日をもって全ての作業を終了した。調査に際して以下の方々のご協力を得た。記して深謝いたします。

調査協力 郡家町役場総務課

鳥取県埋蔵文化財センター

作業協力 安部孝子、上田昌彦、大野昌之、大野美佐栄、清水なみ子、清水好夫、
田中貞子、田中孝子、田中政明、福本弘江

II 調査の概要

山ノ上古墳群の概要

山ノ上古墳群は郡家町大字口山ノ上地内に所在するが、従来の古墳群は山ノ上集落を囲む南北の丘陵上に立地している。

本報告で取扱う山ノ上古墳群は、同集落より県道を挟んだ西側の丘陵上に位置する。同地区の古墳群は、開発計画に基づいて実施した分布調査の結果によって調査対象地となつたものである。分布調査では、丘陵の尾根上で7基の古墳を確認し、丘陵裾部の畠地で土器の散布を認めた。この他に、数箇所で古墳状の高まりあるいはテラス状の平坦部がみられた。丘陵裾部の畠地は、比較的広い平坦部を呈していることから建物跡の存在が考えられた。

調査の方法と経過

今回、試掘調査の対象となった県道の西側丘陵に立地する山ノ上古墳群（以下、山ノ上古墳群第Ⅱ群）は、国府町との境に東西にのびる丘陵より分岐し、南にのびる丘陵から東へ派生した尾根上あるいは斜面に散在している。

発掘調査は、開発計画の調整資料を得るために試掘調査という基本的な性格のため、遺構の存在確認に主眼をおいて実施した。調査地は山林部分と畠地部分とに大別できるが、



第8図 試掘トレンチ配置図

山林部分には主稜線と支稜線の尾根上および斜面に42本、畠地部には8本の合計50本のトレンチを設定した。

墳墓遺構の存在が予想される山林の尾根については、調査前に再度現地踏査を行い、傾斜の変換点や平坦地、部分的な落ち込み等を勘案してトレンチを設定した。そのほか、必要に応じてこれらのトレンチを延長、または新たにトレンチを設けた。調査地点は支稜線ごとに分散しているため、北側よりA～K区を設定した。なお、便宜上各トレンチを以下のように区分けした。(A区：T-1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8. B区：T-9, 10, 11. C区：T-12. D区：T-13, 14, 15, 16, 17. E区：T-18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28. F区：T-29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37. G区：T-38. H区：T-39. I区：T-40, 41, 42. J区：T-43, 44. K区：T-45, 46, 47, 48, 49, 50.) このうち、A～I区が山林部分で、J・K区は畠地部分である。

トレンチ掘り下げは、基本的には調査地の北に位置するA区から始め、B区、C区、K区、J区、I区、H区、G区、E区、F区、D区の順番に行なった。その方法としては、先ず表土の除去を行ない、平面的に遺構の有無を確認しながら進めていったが、最終的にはトレンチの土層断面の観察に依った。なお、検出した遺構については必要に応じて部分的に掘り下げ、その性格を把握した。

その結果、山林部分の尾根上からは溝状遺構、集石遺構、埋葬施設等が検出され、若干の土器片が出土した。また、山裾部の畠地からは掘立柱建物跡に伴う柱穴列が検出された。調査したトレンチについては、平面図及び断面図を作成し、写真撮影を行なった。

今回のトレンチ掘り下げによって、発掘調査の総面積は最終的に約620m²となった。

トレンチ調査の概要

(1) A区の概要

A区は、調査地の最も北側に位置し、南にのびる支稜線の尾根上および山裾を範囲とする。尾根上は比較的広くて緩斜面をなし、地形的に墳墓遺構あるいは住居跡が存在する可能性が推察された。また山裾部では、石材の露呈部分があり、横穴式石室の存在が想起された。尾根上では、放射状に第1、第2、第3の各トレンチを設定した。現地形は、第3トレンチ下部で若干の傾斜変換点がみられ平坦面を作り出していた。山裾部では、石材の露呈が2箇所でみられたことで、露呈部分を中心にトレンチが交差するように第4、第5、第6、第7、第8の各トレンチを設定した。第1～3トレンチでは黄褐色粘質土を表土層とし、5～30cmで明黄褐色を呈する地山面を検出した。第4、5トレンチは、淡橙色粘質土を表土層とし、地山は明黄褐色を呈する。第6～8トレンチは、暗褐色土を表土層とし10～20cmで礫を多く含む淡黄橙色の地山面に達する。以下各トレンチの調査結果について要約する。

第1トレンチ（第8図）

A区の尾根上に位置する。表土下5~30cmで地山面に達する。トレンチ中央部付近に地山を溝状に掘り込んだ痕跡がみられるが、その性格は不明である。このトレンチ内より遺物は検出されなかった。

第2トレンチ（第8図）

第1トレンチの東側に位置する。第1トレンチにみられる溝状の掘り込みを確認するために設定したトレンチで、同様の掘り込みがみられるものの、遺構とは断定しがたい。このトレンチ内より遺物の検出はみられない。

第3トレンチ（第8図）

A区尾根上の東側に位置する。トレンチ下方は、地形的に若干の平坦面がみられた。表土下5~20cmで地山面に達する。地山面直上で若干の炭・焼土がみられたが、遺構・遺物の検出はみられなかった。

第4トレンチ（第8図）

A区南側の丘稜斜面に扁平な石材が露呈しており、この部分に斜面に直交して設定したトレンチである。表土下約20cmで明黄褐色の地山面に達する。トレンチ北側で岩脈が東西にのびた状態で検出された。この岩脈の材質は、地表面に露呈していた石材と同質のものであった。このトレンチ内より遺物は検出されなかった。

第5トレンチ（第8図）

第4トレンチの東側に直交して設定したトレンチである。トレンチ西側で、第4トレンチにみられる岩脈が連続しており、斜面上方にのびている。このトレンチ内より遺物は検出されなかった。第4・5トレンチ内にみられた岩脈は、整った節理をみせており、一見すると横穴式石室の側壁を想起させたが、地山層よりダイレクトに露出している状況より人工物でないことが判明した。

第6トレンチ（第8図）

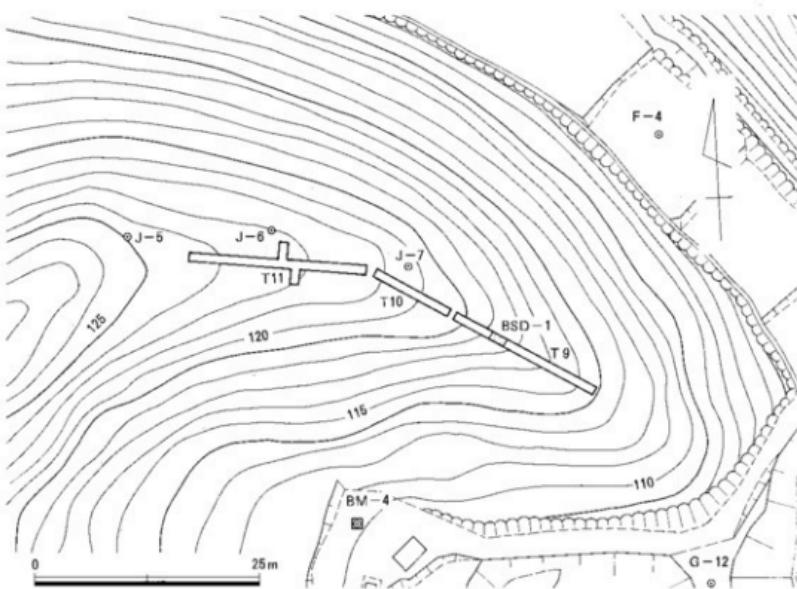
A区の南側山麓に位置する。斜面に直交して設定したトレンチで、北側に石材が露呈していた。表土下5~20cmで、礫を多く含んだ地山面に達する。露呈していた石材は、石室の側壁が崩落した如くの状況を呈していたが、トレンチ掘削の結果岩脈の一部であることが判明した。

第7トレンチ（第8図）

第6トレンチの西に位置する。表土下20~30cmで地山をなす岩盤層に達する。トレンチの西側は若干の崖面をなし、岩脈が検出され東側に連続する。

第8トレンチ（第8図）

第6トレンチの東に位置する。表土下20cmで地山面に達する。トレンチ内は礫を多く含



第9図 B区、トレンチ配置図

む。第7トレンチでみられる岩脈は、第6、8トレンチを経て、第4、5トレンチに連続しているものと思われる。トレンチ内より遺物は検出されなかった。

(2) B区の概要

B区は、A区の南西に位置し、東へのびる小尾根上の下段部分を範囲とする。この尾根は全体的に細い尾根状を呈しているが、標高118m付近に若干の段状をなした平坦面がみられた。また、標高122m付近はやや広い平坦面がみられた。トレンチは、尾根状の稜線に沿って第9、第10、第11トレンチを設定した。地山地形は、現地形にはほぼ準じるが、第9トレンチ西側で凹部がみられ周溝をなしている。各トレンチの表土層は黄褐色を呈するが、第9トレンチ付近の地山層は礫を多く含み淡黄褐色を呈する。第10、11トレンチでは、赤褐色粘質土が地山層となっている。以下、各トレンチの調査結果について要約する。

第9トレンチ（第8・9・10図）

B区の尾根先端部分、標高115～120m付近に設定したトレンチである。トレンチの西側に傾斜変換点がみられ、中央部に若干の平坦部がみられた。標高118付近で、地表面に凹部が認められ周溝をなすと考えられる。表土下5～20cmで地表面に達する。トレンチ中央部分では、表土下に厚さ約15cm前後の盛土が認められた。この盛土の下に、稜線に直交して墓壙状の掘り込みが2箇所に認められた。この掘り込みの埋土は赤褐色を呈し、炭片・

焼土を含んでいる。トレンチ内より遺物は検出されなかった。

第10トレンチ (第8・9図)

第9トレンチの西に位置する。地形的に平坦部をみせていて。地表下10~20cmで、明赤褐色を呈した地山面に達する。トレンチ内より遺構・遺物は検出されなかった。

第11トレンチ (第8・9図)

第10トレンチの西に位置する。やや広い尾根で平坦部をなしていた。地表下20cmで、明赤褐色を呈した地山面に達する。トレンチ内より遺構・遺物は検出されなかった。

(3) C区の概要

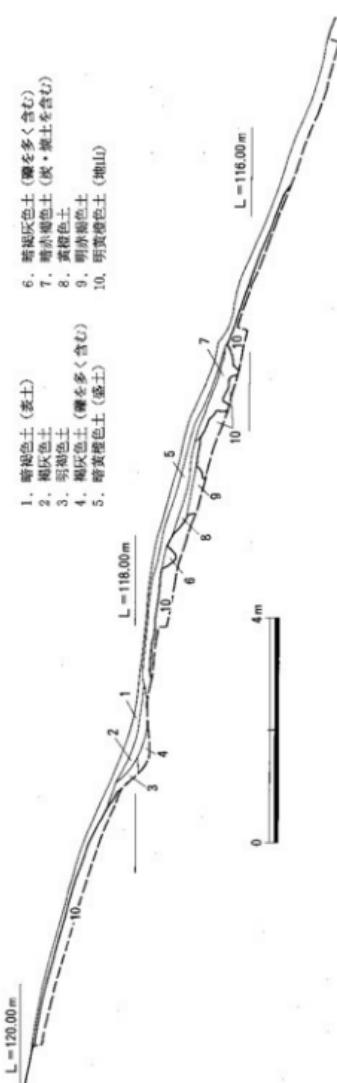
C区は、A区より小さな谷を挟んだ南側に位置し、北にのびる小尾根の先端部をその範囲とする。北側と西側は急傾斜の斜面をなすが、東側は緩やかで果樹園となっている。尾根の先端部は方形に張り出している。トレンチは尾根の稜線に沿って主トレンチを設定し、これに直交する副トレンチを平坦部に設けた。表土層は褐灰色粘質土で、表土下5~30cmで極暗赤褐色粘質土の地山層となっている。

第12トレンチ (第8図)

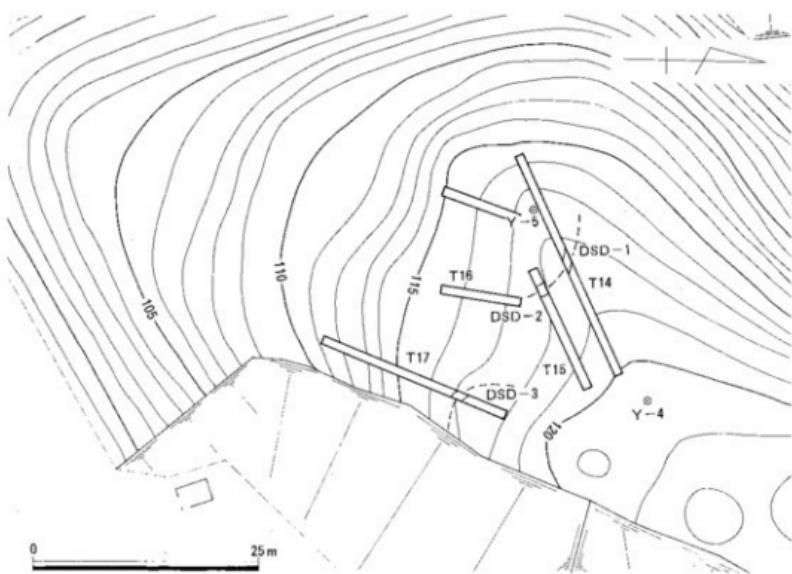
小尾根の先端部に位置し、地形的にテラス状に張り出した平坦部に設定したトレンチである。トレンチ南側は、地表下5~15cmで固いシルト質の地山層に達するが、北側は表土と地山層の間に砂粒状を呈した極暗赤褐色土の堆積がみられた。トレンチ内より遺構・遺物は検出されなかった。

(4) D区の概要

D区は、調査区の中央を東へ分岐した丘陵の先端部より更に南に屈曲してのびる小尾根に位置する。この小尾根の先端部を調査範囲としているが、



第10図 トレンチ実測図 (T 9)



第11図 D区、トレンチ配置図

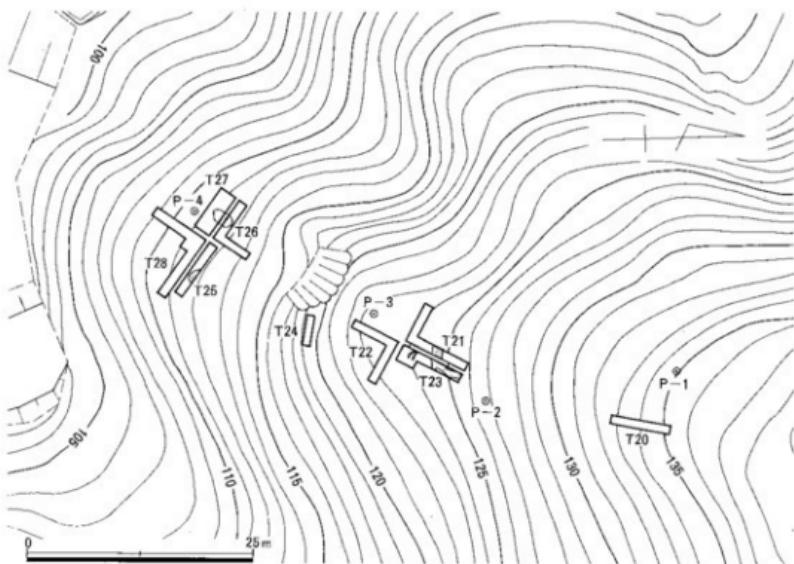
地形的には広くて緩やかな傾斜地を呈している。微地形的にみると、尾根の先端部の中央部に窪地状の狭い谷が介在するため尾根が二方向に流れていることが認められる。トレンチは、この二方向の小尾根の稜線に沿って設定した。西側部分には第13、14、15トレンチを設定し、東側に第17トレンチを設けた。また、第15トレンチの調査結果をみて、東側に隣接して第16トレンチを設定した。第13、16トレンチの表土層は、既に重機による搅乱を受けており流失していた。第14、15、17各トレンチは暗黄褐色粘質土を表土層とし、10～30cmで黄橙色粘質土の地山面を検出した。以下、各トレンチの調査結果について要約する。

第13トレンチ（第8・11図）

D区の西に位置し、西側の支稜線に沿って設定したトレンチである。地表面は既に失っていたが、第14、15トレンチで検出された周溝を確認するため設定したものである。トレンチ内より遺構・遺物は検出されなかった。

第14トレンチ（第8・11・16図）

第13トレンチの北に位置する。西側の支稜線の中央部に設定したトレンチで、表土下10～20cmで地山面に達する。トレンチ中央部で、地山面を掘り込んで溝状遺構がつくられている。溝は幅50cm内外、深さ約30cmを測る。溝は、斜面下方に向けて内湾しているが、トレンチ南側は段をつけて落ち込んでおり、後世の搅乱・改変等が考えられる。トレンチ北



第12図 E区、トレンチ配置図

側の表土中より若干の須恵器片と、朱彩を施した土師器片が検出された。溝内よりは遺物は検出されなかった。

第15トレンチ (第8・11図)

第14トレーニングの東に並行して位置する。第14トレーニングで検出された溝状構造が、トレーニング南側に認められた。溝は、現地形の斜面に直交して掘られ、第14トレーニングの溝の方向を考えると不整な円形を呈するものと思われる。このトレーニング内より遺物は検出されなかつた。

第16トレンチ (第8・11図)

第15トレーナーの南に位置する。第14、15トレーナーにみられる溝状遺構の確認のため設定したものであるが、このトレーナー内より遺構・遺物は検出されなかった。

第17 トレンチ (第8・11図)

D区の東側の支稜線に位置する。トレンチの北側に接して山ノ上15号墳が立地する。トレンチは、この15号墳の南側にテラス状の平坦部が遺存しているため、この部分を中心に設定したものである。トレンチのやや北寄り、平坦部の傾斜変換点あたりの地表下20cmに盛土が認められた。盛土には焼土・炭の混入がみられる。一段下った部分では、特に焼土・炭が集中しており溝状を呈している。このトレンチより遺物は検出されなかった。

(5) E区の概要

E区は、調査区のほぼ中央部に位置し、東へ分岐した支稜線の標高約140m付近の小ピークと南へのびる小尾根をその範囲とする。小ピークには、稜線に沿った第18トレンチと共に直交する第19トレンチを設定した。斜面を南にやや下ったテラス状を呈した平坦部に第20トレンチを設けた。小ピークより南へ下る尾根上に2箇所のテラス状平坦部が認められた。この平坦部には、十字状にトレンチを設定し、それぞれ第21～23トレンチ、第25～28トレンチを設定した。2箇所の平坦部の中間に、石材露呈部分がみられたため、斜面に並行に第24トレンチを設けた。第18～20トレンチでは明褐色粘質土を表土層とし、約20cmで明黄褐色を呈する地山面を検出した。第21～23トレンチでは、黄褐色土を表土層とし、表土下10～100cmで地山面に達するが、第22トレンチでは約80cm内外の盛土層が認められた。第24トレンチは、石材が露呈していた箇所で、表土層は黄褐色土である。第25～28トレンチでは、暗褐色土を表土層とし、表土下5～40cmで黒褐色を呈する地山面を検出する。斜面下方に張り出す第28トレンチでは、盛土層が認められた。以下、各トレンチの調査結果について要約する。

第18トレンチ（第8図）

E区の最も北に位置し、小ピーク状の稜線に沿って設定したトレンチである。表土下20cmで地山面に達する。このトレンチ内より遺構・遺物は検出されなかった。

第19トレンチ（第8図）

第18トレンチの西に位置する。小ピークより南側の斜面にかけて設定したものである。表土下20cmで地山面に達する。このトレンチ内より遺構・遺物は検出されなかった。

第20トレンチ（第8・12図）

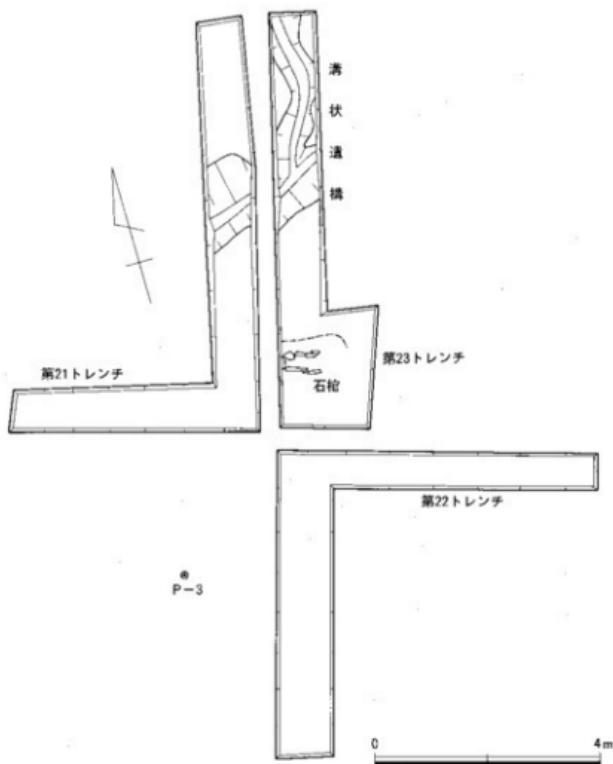
E区の小ピークより南へのびる尾根上に設定したものである。表土下10cmで地山面に達する。このトレンチ内より遺構・遺物は検出されなかった。

第21トレンチ（第8・12・13・16図）

E区の中央部に位置し、標高124m付近にみられるテラス状の平坦部に設定したトレンチである。テラス中央部を基点とし「L」字状に屈曲し、西側の斜面にのばした。トレンチ北側では約10cm内外で岩盤に達し、溝状遺構を検出した。溝は、岩盤層を浅い「U」字状に切削して作っている。岩盤層は平坦部の中央部付近で終り、張り出し部分は砂質土が堆積する。西側に屈曲する部分では、表土下20cmで盛土層が認められ、盛土中より須恵器片の出土をみた。

第22トレンチ（第8・12・13図）

平坦部の南側斜面と東側斜面に屈曲して設定したトレンチである。平坦部縁辺部においては、約80cmの盛土が認められた。平坦部では、盛土に掘り込まれた遺構状の土色変化が



第13図　トレンチ実測図（T21～23）

みられるが、現段階では不明瞭である。このトレンチ内より遺物は検出されなかった。

第23トレンチ（第8・12・13・14図）

第21トレンチに並行して西に位置する。トレンチ北側で、第21トレンチと同様に溝状遺構を検出したが、溝は平坦部を囲むようには作られず東側斜面にのびる部分と、斜面上方に続く部分がみられる。斜面上方へ続く部分は、溝としての機能より墓道としての性格が考えられる。トレンチ南側では、岩盤層が終る地点に稜線に直交する箱式石棺が検出された。石棺は、既に蓋石、東側の側板の一部と小口板を欠いた状態で検出された。石棺の規模は、残存長72cm、幅約25cm、西小口幅約20cmを測る小形のものである。南側の側板は2枚、北側のそれは4枚が遺存していた。石棺の北側と東側の一部で墓壙掘り方が平面的に観察できた。それによると石棺は、最大長約1m程度の規模と思われる。

第24トレンチ (第8・16図)

第22トレンチの南側斜面下方に位置する。トレンチの西は崖面となっているが、その境目に石材が露呈し石室の側壁状に観察された。トレンチ内は、黄褐色土を表土とし、表土下20cmで岩盤層に達した。露呈していた石材は、遺構に伴うものではなく、岩盤の露頭部分であることが判明した。このトレンチ内からは、表土中より須恵器杯身が検出された。

第25トレンチ (第8・15図)

E区の最も南に位置し、小ピークより南にのびる尾根の最下部に所在する平坦部に設定したトレンチである。トレンチは、平坦部と斜面上方への傾斜変換点

に斜面と並行して設定した。トレンチ西側では、約15cmで地山面に達するが、地山は東へ向ってなだらかに傾斜する。トレンチ中央部には、角礫を積み重ねた集石遺構がみられた。また、この集石付近で須恵器片の出土をみた。

第26トレンチ (第8・15・16図)

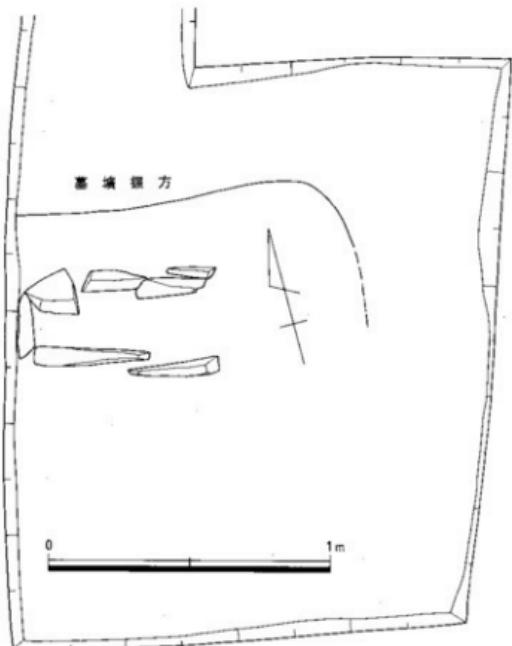
第25トレンチの西に位置し、「L」字状に屈曲させたトレンチである。斜面上方部分は約5cmで地山面を検出するが、平坦部では約15~20cmで地山層に達する。平坦部のトレンチ中央部で集石遺構がみられ、須恵器片の出土をみた。

第27トレンチ (第8・15図)

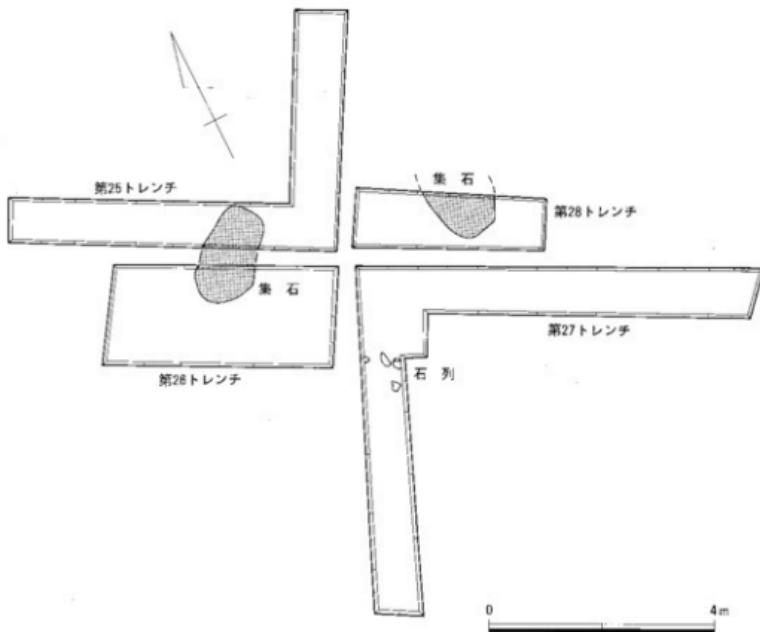
第26トレンチの南に位置する。地表下約10cmで遺構面を検出した。第26トレンチにみられる集石遺構を、本トレンチでも確認した。集石の範囲は長軸約180cm、短軸約100cmを測る。このトレンチ内より遺物は検出されなかった。

第28トレンチ (第8・15図)

第25トレンチの南に位置する。「L」字上に屈曲させたトレンチで、地表下30~100cmで地山面に達する。南側に張り出す部分では盛土が認められた。地山面は、第26トレンチの



第14図 第23トレンチ、石棺実測図

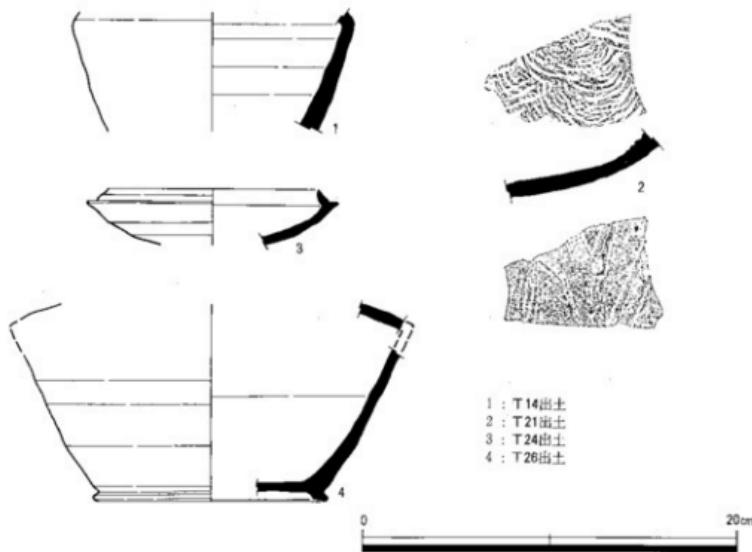


第15図　トレンチ実測図（T25～28）

北側で検出された地山面の傾斜をやや緩めて南へ下っていることが判明した。平坦部のやや縁辺部寄りの地山面直上では、石列状に角礫が埋置されていたが、現段階ではその性格等は不明である。このトレンチ内より遺物は検出されなかった。

(6) F区の概要

F区は、調査地の中央部を東へ分岐してのびる支稜線の基部に所在する小ピーク上と、その南へのびる尾根上を調査範囲とする。小ピークと、南へのびる主稜線の基部との間に掘割状の窪地がみられ、南へのびる尾根上にはテラス状の平坦部が連続して所在する。トレンチは支稜線沿いと、平坦部に設定した。小ピーク付近では、稜線に沿って第29トレンチを設定した。掘割り状の窪地より遺物を伴って溝状遺構が検出されたため、本トレンチに平行して小ピーク上に第30トレンチ、やや南に第31トレンチを設定した。小ピークの南西では、やや広めの平坦部がみられたため第32、33トレンチを設定した。この他、南へのびる尾根上に平坦部が連続するため、第34～37トレンチを設定した。各トレンチの表土層は、おおむね明黄褐色を呈していた。以下、各トレンチの調査結果を要約する。



第16図 トレンチ内出土遺物実測図

第29トレンチ (第8・17・18・19図)

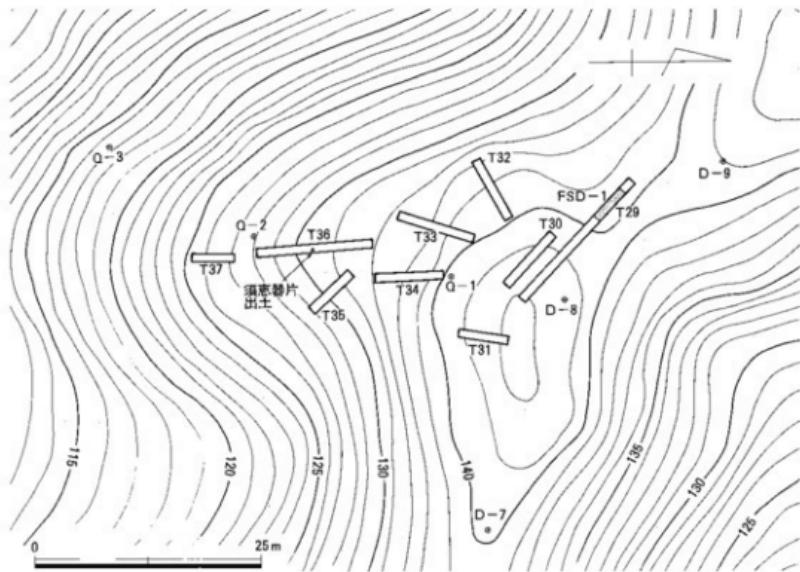
F区の最も北に位置し、稜線に沿って小ピーク上より掘割り状の窪地にかけて設定したトレンチである。地表下30cmで地山面に達する。トレンチ西側の窪地部分では、地表下約15cmで黒褐色粘質土の堆積がみられ、その範囲は幅約2.7mを測る。堆積は約30cmの深さに達している。黒褐色土の上層部分より須恵器が検出された。器種としては、大形甕片・杯身・杯蓋・高杯脚部等がみられた。このうち杯身・杯蓋はセット状態で出土したものもみられた。これらの遺物は、出土状態からみて小ピーク側からの転落、あるいは廃棄したものと考えられる。トレンチの西方の稜線上は地形的にみて、平坦地が広がるため何らかの遺構の存在が考えられなくもないが、遺物は溝の東側に集中していることから小ピーク側を意識したものと推察される。

第30トレンチ (第8・17図)

小ピークの西側に設定し、第29トレンチの南側に位置する。地表下20~30cmで地山面に達する。このトレンチ内より遺構・遺物は検出されなかった。

第31トレンチ (第8・17図)

第30トレンチの東に位置する。表土下20cmで地山面をなす岩盤層に達する。このトレンチ内より遺構・遺物は検出されなかった。



第17図 F区、トレーニチ配置図

第32トレーニチ (第8・17図)

小ピークの南西側斜面に方形に張り出した平坦部に設定したトレーニチである。トレーニチ北側では、地表下約5cmで岩盤層を検出し、平坦部ではなだらかに斜面下方につづく。このトレーニチ内より遺構・遺物はみられなかった。

第33トレーニチ (第8・17図)

第32トレーニチの東に位置し、平坦部の東側縁辺部に設定したトレーニチである。表土下5~10cmで地山面をなす岩盤に達する。このトレーニチより遺構・遺物は検出されなかった。

第34トレーニチ (第8・17図)

第33トレーニチの東に位置する。地形的には、窪地状の平坦部をなす。地表下10~15cmで地山面に達する。このトレーニチより遺構・遺物は検出されなかった。

第35トレーニチ (第8・17図)

第34トレーニチの南に位置し、窪地状の平坦部をなす。地表下15~20cmで地山面に達し、遺構・遺物の検出はみられなかった。

第36トレーニチ (第8・17図)

第35トレーニチの西に位置する。地形的には小尾根の稜線状を呈するが、若干の高まりとテラス状の平坦部が連続する。表土層は砂質土で、表土下5~20cmで地山面に達する。ト

レンチ中央の平坦面縁辺部では、砂質土のよく締った盛土層が認められた。この盛土中より、小片であるが須恵器片（蓋）の出土をみた。

第37トレンチ（第8・17図）

第36トレンチの南に位置する。地形的にみて若干の平坦部を呈す。地表下20cmで地山面に達する。このトレンチより遺構・遺物の検出はみられなかつた。

（7）G～I区の概要

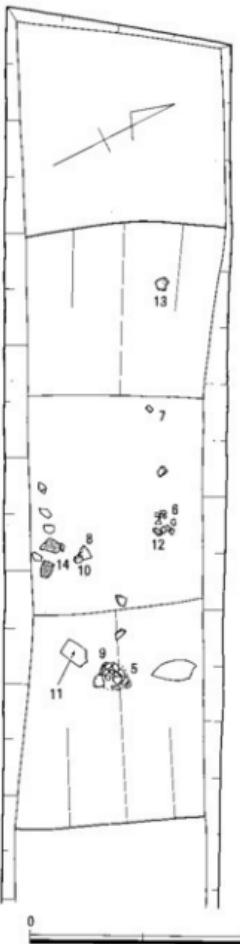
町界境の丘陵より分岐し、南へのびる尾根の主稜線上に所在する。G～I区は、この主稜より若干東方に突出する部分を調査範囲とした。調査区は、北よりそれぞれG区：第38トレンチ、H区：第39トレンチ、I区：第40、41、42トレンチを設定した。以下、各トレンチの調査結果を要約する。

第38トレンチ（第8図）

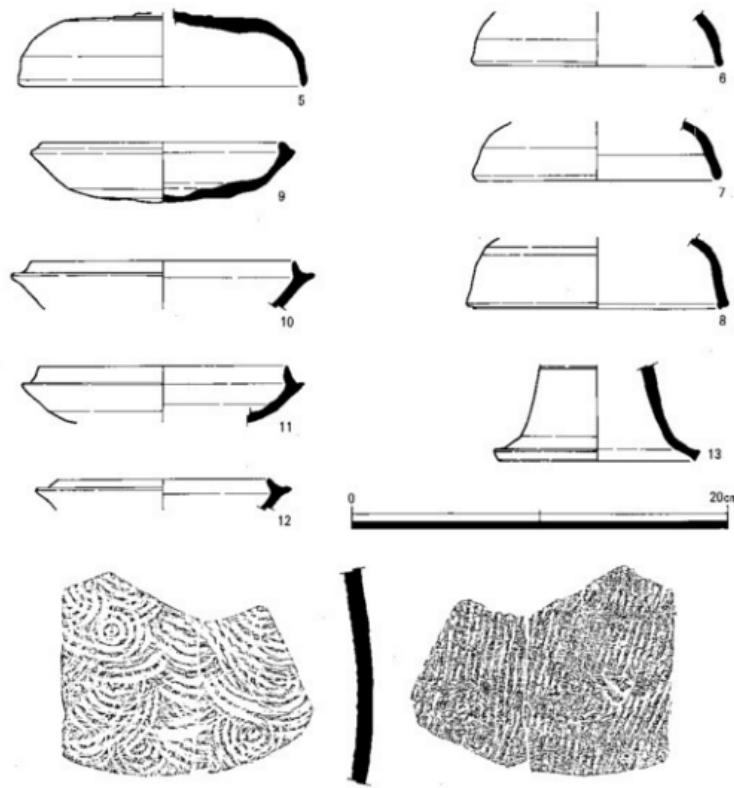
G区に位置する。主稜線より南東に下る小尾根上に若干の平坦部が連続する。明褐色粘質土を表土層とし、表土下約30cmで礫を多く含む黄橙色を呈した地山面に達する。平坦部は、斜面上方を掘削して堆積させたもので遺構・遺物の検出はみられなかつた。

第39トレンチ（第8・20図）

H区に位置する。主稜線より北東に突出する尾根上に設定したトレンチで、平坦面が二段連続している。トレンチは、明褐色粘質土を表土層とし、表土下20～30cmで地山面に達する。地山は、トレンチ南側では明褐色を呈した砂礫土である。北側では明黄褐色土で一部に岩盤を検出した。トレンチ中央の地形的に段をなす下部で、尾根を分断する溝状遺構を検出した。平坦面の上段部分で、断面逆台形を呈した墓壙状の掘り込みを認めたが、現段階では断定しがたい。下段部分のトレンチ内では、遺構・遺物を検出するには致らなかつた。トレンチ北側の斜面では、一部に焼土と炭を混入したピットがみられた。



第18図 第29トレンチ、土器出土状態図



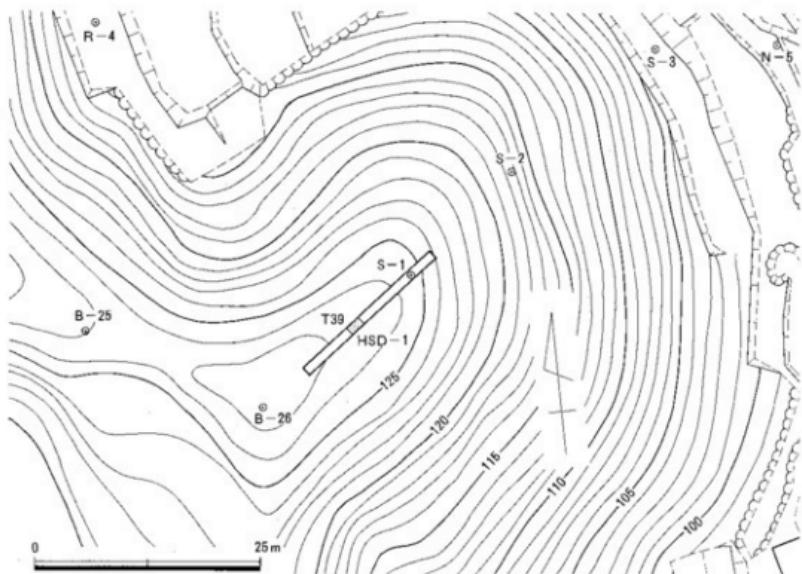
第19図 第29トレンチ、出土遺物実測図

第40~42トレンチ (第8図)

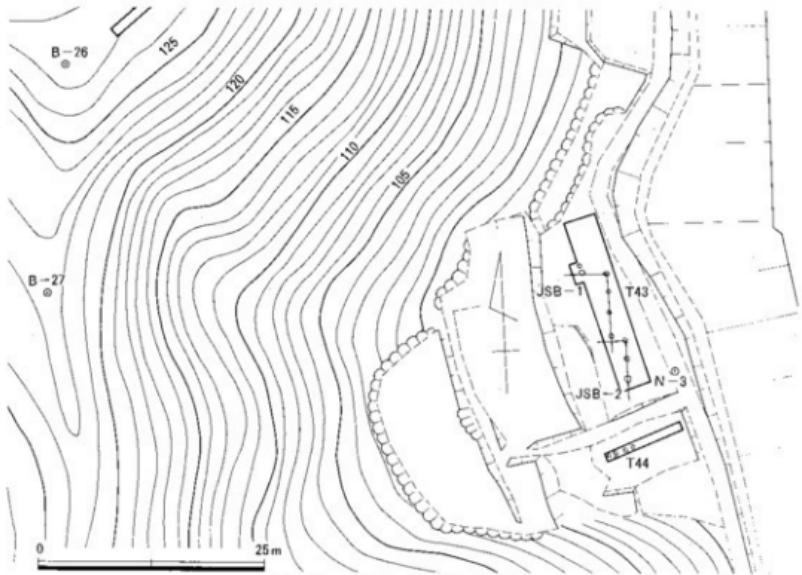
いずれもI区に位置する。I区の立地する主稜上は比較的広い平坦面をなし、東側へ突き出る尾根部分も広く緩やかな傾斜面となっている。トレンチは、尾根部分に設定した。表土層は淡黄褐色を呈した粘質土で、表土下20~30cmで黄橙色の地山面を検出した。

第40トレンチは、主稜の平坦面より北東に向けて設定したもので、地表下20~30cmで地山面に達する。トレンチ東側では、地山面に掘り込まれた堅穴住居状の平坦面が検出された。掘り込みは、トレンチに直交し、埋土は明黄褐色粘質土を呈し少量の炭片を混入させていた。この平坦部の東側は溝状に窪みをつけるが、堅穴住居に通有な側溝とはいい難い。

第41トレンチは、第40トレンチの北に位置する。第41トレンチにみられる堅穴住居状の



第20図 H区、トレンチ配置図



第21図 J区、トレンチ配置図

平坦部を確認するために設定したものである。本トレンチにおいては、豊穴住居状の掘り込みを確認することはできなかった。従って、第40トレンチにおいては、豊穴住居状の平坦部の性格は、埋土中に炭片や砂利を混入させていることを考えれば、遺構の存在を否定できないが現段階では不明としておきたい。

第42トレンチは、第40トレンチの南に位置する。表土下20cmで地山面に達する。トレンチ中央でピット状の落ち込みがみられるが、地山面の窪みと思われる。第40~42トレンチ内より遺物は検出されなかった。

(8) J区の概要

調査区西側を南にのびる主稜の東斜面裾部に位置し、主稜より突き出たH区とI区に挟まつた丘陵裾部の畠地を調査範囲としている。畠地は階段状に3面連続する。トレンチは、後世の改変が行われていないと思われる下段の畠地に設定した。表土層は耕作土で、表土下20~30cmで遺構面を検出した。遺構面からは、堀立柱建物跡に伴うと思われる柱穴列およびピットを検出した。以下、各トレンチの調査結果を要約する。

第43トレンチ (第8・21・22・23図)

畠地の最下段に位置し、農道に平行して設定したトレンチである。表土下20cmで黒褐色粘質土の遺構面に達する。トレンチ北側では、軟質の藻を含む浅黄色の地山層がみられた。遺構面の一部では、地山の土を盛った部分もみうけられる。トレンチ中央より南側にかけて柱穴列が検出された。柱穴列は堀立柱建物に伴うものと思われ、2列が認められた。この柱穴列は同一の方位をとり、桁行の軸線はN14°Wを示す。梁行は、ともにトレンチ外にのびており不明である。検出された柱穴列の規模は以下の通りである。

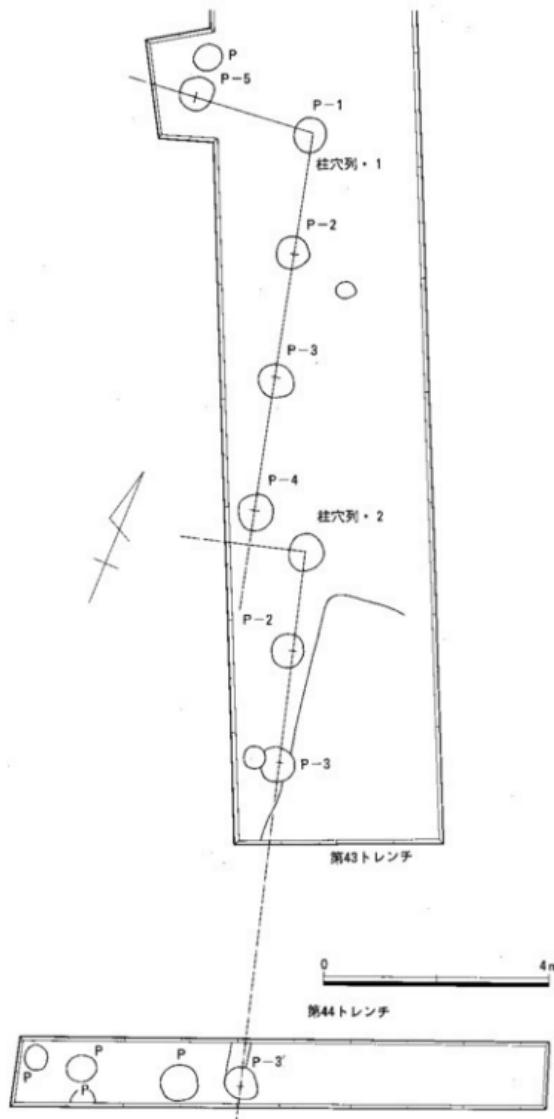
柱穴列・1

トレンチの東側に位置する。検出された柱穴は桁行に4穴、梁行に1穴がみられた。各柱穴間距離は、P-1より2.18・2.20・2.40mを測りP-1~P-5間は2.18mである。各柱穴の規模は、P-1 (62×58)・P-2 (60×60)・P-3 (64×60)・P-4 (68×64)・P-5 (66×58) cmである。各柱穴の埋土は褐色粘質土で、少量の土師器片・須恵器片を検出したが、時期を特定するには致らなかった。

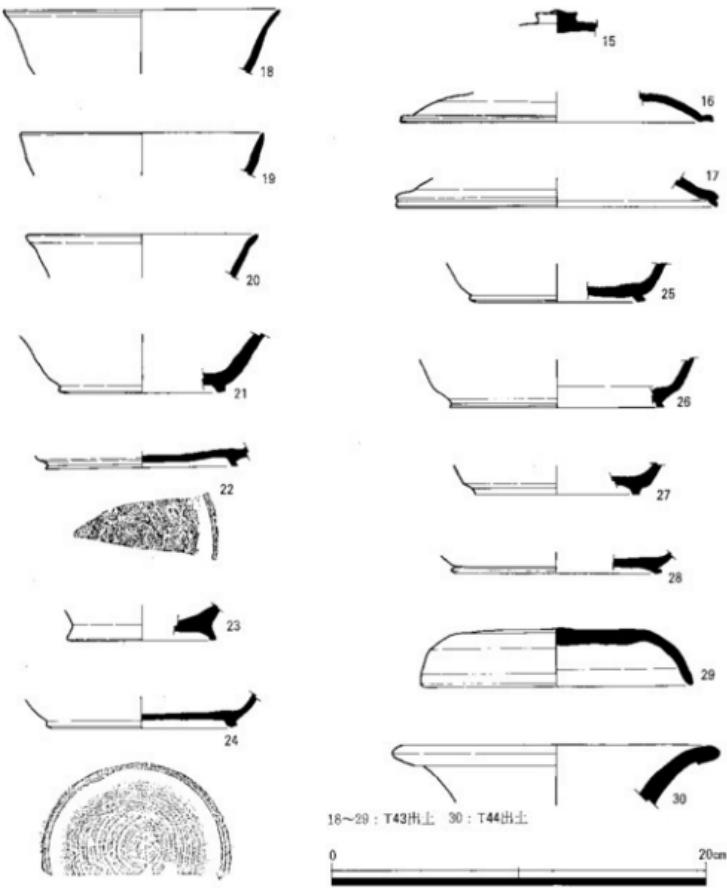
柱穴列・2

柱穴列・1の東に平行して検出された。トレンチ内では3穴がみられた。東方向に延長すると第44トレンチのピットが同一線上に位置するものがみられる。各柱穴間距離は、P-1より1.80・2.00mを測り、P-3~P-3'間は5.80mである。各柱穴の規模は、P-1 (68×62)・P-2 (64×58)・P-3 (64×60)・P-3' (63×58) cmである。

以上の柱穴列の他、柱穴列・2の東側では方形の掘り込みがみられ、柱穴列より先行する遺構の存在が認められる。



第22図 トレンチ実測図 (T43・44)

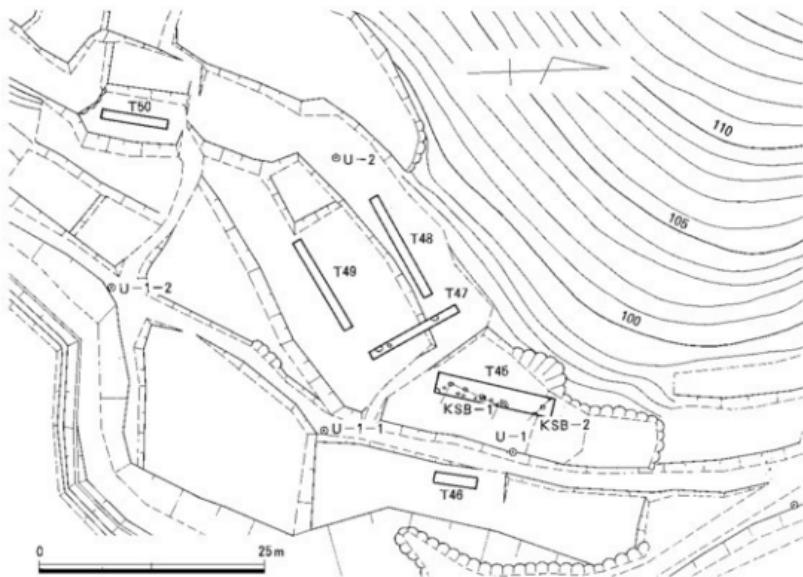


第23図 トレンチ内出土遺物実測図

このように、本トレンチでは2棟の掘立柱建物とこれに先行する竪穴住居状遺構を検出したが、各遺構の年代を特定する資料は少ない。しかしながら、遺構面を覆った表土層より出土した遺物からみて7世紀後半～8世紀末と考えておきたい。

第44トレンチ（第8・21・22・23図）

第43トレンチの南に東西方向に設定したトレンチで、表土下30～40cmで遺構面に達する。トレンチの東側で柱穴と思われるピット5穴を確認した。このピットの内、トレンチ中央に位置するものは、第43トレンチで検出された柱穴列・2の延長線上にある。このピット（P-3'）とP-3の柱穴間距離は5.8mを測り、未調査部分に2穴存在すると思われ桁行5間の建物跡が推定される。遺構面覆土および表土中より多数の遺物を検出したが、遺



第24図 K区、トレンチ配置図

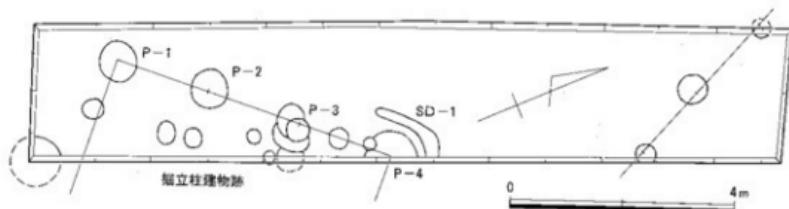
構の年代を特定するには致らない。遺物は、土師器・須恵器・磨製石斧等がみられた。

(9) K区の概要

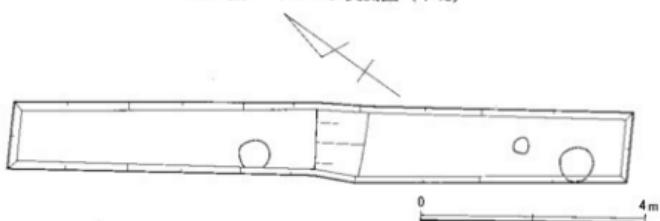
調査区の最も南に位置する。南にのびる主稜の南端部よりやや東へ突き出た平坦部を調査範囲としている。主稜上に位置する日区より南へ一段下った鞍部を基点とし、東へ緩やかな傾斜面に畑地が連続する。トレンチは、最下段の畑地より一段上った地点を中心にして設定した。トレンチは、北側より遺構の存在を確認しつつ、第45・46・47・48・49・50トレンチを順次設定していった。トレンチの表土層は耕作土で褐色粘質土である。表土下15~30cmで遺構面を検出した。遺構面の土質は、各トレンチごとに差異を示している。第45・48トレンチでは、丘陵の地盤層（地山）の上に形成された畠地表をなすと思われる淡橙色粘質土を遺構面とする。第46・47・49トレンチでは、旧地表面を覆う黒褐色粘質土の上面を遺構面としている。第50トレンチでは、表土下約15cmで瓦礫層を検出している。以下、各トレンチの調査結果を要約する。

第45トレンチ（第8・24・25・27図）

K区の中央を南北に通る農道より一段上の畑地に設定したトレンチである。表土下15~20cmで遺構面に達する。トレンチ内より、掘立柱建物に伴う柱穴列を2棟分確認した。トレンチ北側では、N26°Wの方位をとる柱穴列が認められ、これに伴って3穴の柱穴が検



第25図 トレンチ実測図 (T45)



第26図 トレンチ実測図 (T47)

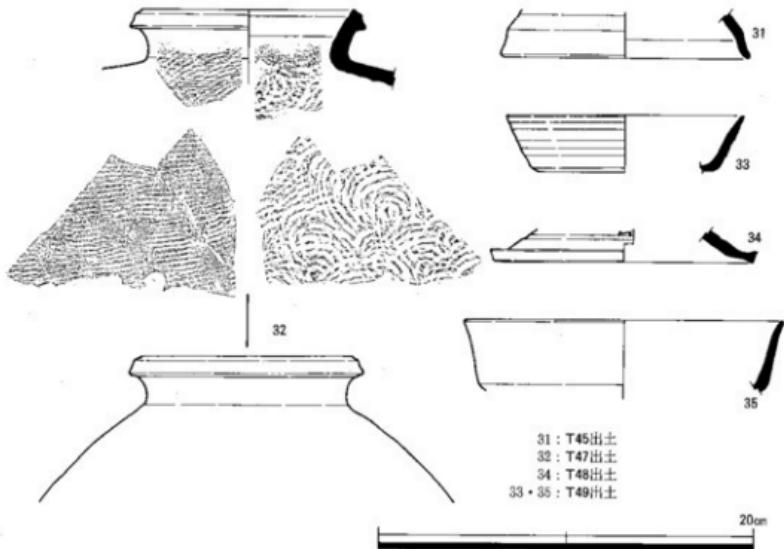
出された。2穴はトレンチ側壁直下にあり規模は不明であるが、1穴は(53×53)cmを測る。トレンチ南においては、N41°Eの方位をとる柱列があり、4穴が認められる。各柱穴間距離は、P-1より1.72・1.72・1.74mを測る。各柱穴の規模は、P-1(76×69)・P-2(74×68)・P-3(44×44)・P-4(94×-)cmを測る。トレンチ中央に位置するP-4を開んで雨落ち溝(SD-1)が確認された。溝は幅20~24cm、長さ約1.5mを検出し、南側は削平を受けている。この溝は、P-4付近で「L」字状に屈曲させており、P-4が建物の隅部に該当することを示す。これらの柱穴の他、柱穴列に接近もしくは重複するピットがみられることから、建替えや重複する建物の存在が考えられる。このトレンチ内より検出された遺物は少量であり、掘立柱建物跡の年代を特定するには致らないが、P-2より出土した須恵器片で推定して8世紀後半代と考えておきたい。

第46トレンチ (第8・24図)

第45トレンチの東に位置する。表土下20cmで遺構をなすと考えられる黒褐色土層に達する。このトレンチ内より遺構・遺物は検出されなかった。

第47トレンチ (第8・24・26・27図)

第45トレンチの南に位置し、等高線に直交して設定したトレンチである。表土下20~30cmで遺構面に達した。トレンチ北側では、淡橙色粘質土面で須恵器壺が出土し、トレンチ中央の崖面にピット断面がみられる。また、この遺物検出面の上には黒褐色粘質土が覆っており、トレンチ南側へのびている。この黒褐色粘質土面でも、柱穴と思われるピットが



第27図 トレンチ内出土遺物実測図

確認された。

第48・49トレンチ (第8・24・27図)

K区中央を南北にのびる農道の丘陵側畠地に設定したトレンチで、中段に第49トレンチ、上段に第48トレンチが位置する。各トレンチは、畠地の段差にそれぞれ平行して設定した。

第48トレンチは、第47トレンチの西に位置し、同トレンチ北側で確認された遺物検出面の広がりを確認するため設定したものである。表土下約25cmで遺構面に達した。遺構面より遺物の検出はみられなかったが、ピットの存在が確認された。

第49トレンチでは、表土下20cmで遺構面に達する。第47トレンチ南側で検出されている黒褐色粘質土の遺構面の広がりが、第49トレンチでも確認できた。遺構面ではピットの存在が確認できたが、遺物は、第48トレンチと同様に表土中よりの出土であった。

第50トレンチ (第8・24図)

第49トレンチの南西に位置する。表土下約20cmで瓦礫層を検出した。トレンチ内より、焼土塊・窯道具などがみられる。同所は、近代初期の瓦窯の所在が指摘されているが、トレンチ内の遺物等は、窯跡の存在を裏付けるものといえよう。

III 小 結

今回の試掘調査で得られた所見を以下にまとめ、若干の検討を加えてみたい。

丘陵部の調査では、墳墓の存在を示唆する遺構を数箇所で確認し、尾根沿いに墳墓が形成されていることが推察された。A・C区では、墳墓あるいは住居跡の存在が推定されたが、今回の試掘トレンチにおいては何も検出されなかった。

B区は、第9トレンチの調査結果より墳墓が存在することが判断された。すなわち、トレンチ西側で周溝が検出され、墳頂平坦部では埋葬施設に該当すると思われる土層変化が認められた。トレンチ内からは遺物の出土がみられず、築造年代は不明である。

D区では、第14・15・17トレンチの調査結果により墳墓が存在することが判断された。DSD-1・2は周溝、DSD-3は周溝もしくは埋葬施設と考えられる。各トレンチとも遺物は検出しておらず、わずかに第14トレンチ北側の表土中より須恵器・土師器片がみられた。この遺物は、上記の遺構との関連性は稀薄であるが、一応古墳時代後期の年代を与えておきたい。

E区では、2箇所で墳墓の存在が確認された。すなわち、第21～23トレンチ、第25～28トレンチである。前者は、周溝と埋葬施設が検出された。埋葬施設は、小形の箱式石棺であり、墳頂平坦部中央付近の土層観察では木棺墓の存在を示唆する土色変化が認められた。出土した土器は、須恵器甕片であるため築造時期を確定し難いが、第24トレンチ出土の須恵器杯身を斜面上方よりの転落と考えるならば、一応古墳時代後期のものと思われる。後者は、集石遺構と墳丘盛土が認められた。集石遺構は2箇所で検出された。集石遺構の性格は現段階では不明であるが、出土した須恵器によると奈良時代の所産と思われる。

F区では、第29・36トレンチの調査結果により墳墓が存在すると判断された。第29トレンチでは周溝が検出された。周溝内には、埋土上層部分で須恵器が散在していた。第36トレンチにおいては、遺構の検出はみられなかったが、墳丘盛土中で須恵器小片が出土している。第29トレンチで出土した須恵器は、蓋杯・高杯脚部・甕片がみられ、年代としては古墳時代後期の所産と考えられる。

H区では、第39トレンチ内で周溝が検出され、墳墓の存在が確認された。

I区では、第40トレンチ内で竪穴住居状の掘り込みと、それに伴う平坦部が検出されたが、現段階では遺構としての特定はできなかった。

J区では、掘立柱建物2棟をはじめ、集落跡の存在を示す遺構が検出された。掘立柱建物は、柱穴列のみの検出であったが、丘陵側にその広がりが示唆された。また、平坦部の縁辺部においては竪穴住居状の掘り込みも認められている。出土土器は古墳時代後期から奈良時代にかけての時期のものが主体をなす。

K区では、第45・49トレンチにおいて掘立柱建物跡や柱穴と考えられるピットを検出した。第45トレンチでは、地山に堆積した淡橙色粘質土面を遺構とするが、他のトレンチでは、さらに堆積した黒褐色粘質土面より掘り込まれている。このため、K区では遺構面が二面存在することが知られた。これらの掘立柱建物跡の所属する年代は、わずかな調査面積と乏しい遺物で時期を特定するには早急に過ぎるが、古墳時代後期から平安時代初頭にかけての時期のものがみられた。

丘陵裾部に位置するJ区、K区で検出された掘立柱建物跡群は、一定の方向性をとり柱穴の規模や面的な広がりを考慮すると、集落跡のみでなく官衙的な性格が考えられる。

以下、各調査区について要約する。

A区…丘陵頂部付近には墳墓が形成されていると考えられるが、丘陵斜面あるいは裾部においては遺構の検出はみられなかった。

B区…尾根上に木棺墓を主体とする古墳が築かれている。(山ノ上27号墳)

C区…尾根先端部の平坦部においては、遺構は検出されなかった。

D区…尾根上に墳墓群が形成されている。(山ノ上16・17号墳)

E区…南にのびる尾根上に墳墓群が形成されている。今回未調査であるが、南西にのびる小尾根上にも墳墓群が形成されている可能性が充分に考えられる。(山ノ上28・29号墳)

F区…丘陵上と南にのびる小尾根上に墳墓が形成されている。(山ノ上30・31号墳)

G区…遺構は検出されなかった。

H区…北東にのびる尾根上に墳墓の存在が知られた。(山ノ上21号墳)

I区…丘陵頂部の平坦面に住居跡が形成されている可能性が考えられる。

J区…小さな谷全域に、竪穴住居、掘立柱建物等が存在する。

K区…丘陵突端部の平坦面に、掘立柱建物跡群が形成されている。

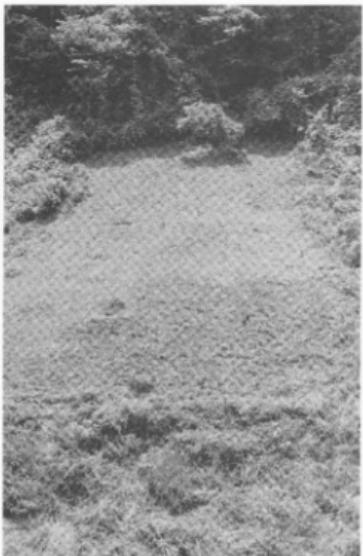
今回の調査で以上の所見が得られ、所期の目的は充分達成されたものと思われる。調査に際し、発掘調査から報告書作成にいたるまで、多くの方々の協力、御教示を受けた。記して謝意に代えたい。

第2表 調査トレンチ一覧表（山ノ上地区）

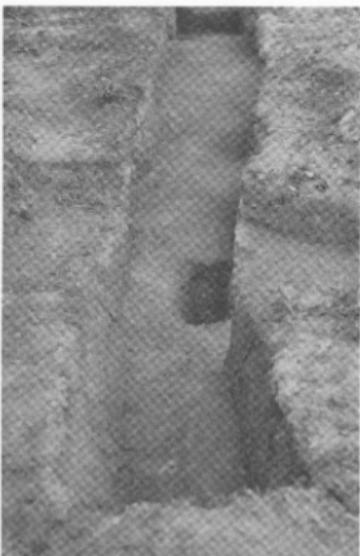
トレンチ番号	大きさ (長さ×幅) 単位(cm)	遺構	出土遺物
第1トレンチ	20×1	—	—
第2トレンチ	9×1	—	—
第3トレンチ	23×1	—	—
第4トレンチ	10×1	—	—
第5トレンチ	4×1	—	—
第6トレンチ	8×1	—	—
第7トレンチ	7×1	—	—
第8トレンチ	4.5×1	—	—
第9トレンチ	17×1	山ノ上27号墳の周溝	—
第10トレンチ	9.5×1	—	—
第11トレンチ	20×1	—	—
第12トレンチ	13+11×1	—	—
第13トレンチ	9×1	—	—
第14トレンチ	21×1	山ノ上17号墳の周溝	須恵器・土師器
第15トレンチ	14.5×1	山ノ上17号墳の周溝	—
第16トレンチ	9×1	—	—
第17トレンチ	22×1	山ノ上16号墳の周溝	—
第18トレンチ	9.3×1	—	—
第19トレンチ	12.5×1	—	—
第20トレンチ	7×1	—	—
第21トレンチ	8+4×1	山ノ上28号墳の周溝	須恵器
第22トレンチ	6+5.5×1	—	—
第23トレンチ	8×1~2	山ノ上28号墳の周溝・石棺	—
第24トレンチ	4×1	—	須恵器(环身)
第25トレンチ	4×1	集石(山ノ上29号墳)	須恵器
第26トレンチ	4+6×1	集石(山ノ上29号墳)	須恵器
第27トレンチ	4×1.5	集石(山ノ上29号墳)	—
第28トレンチ	7+6×1	列石(山ノ上29号墳)	—
第29トレンチ	18×1	山ノ上31号墳の周溝	須恵器
第30トレンチ	7.5×1.5	—	—
第31トレンチ	6×1	—	—
第32トレンチ	7.5×1	—	—
第33トレンチ	9×1	—	—
第34トレンチ	8×1	—	—
第35トレンチ	6×1	—	—
第36トレンチ	13×1	山ノ上30号墳の埴丘盛土	須恵器
第37トレンチ	5×1	—	—
第38トレンチ	18×1	—	—
第39トレンチ	19×1	山ノ上21号墳の周溝	—
第40トレンチ	14.5×1	—	—
第41トレンチ	9×1	—	—
第42トレンチ	9×1	—	—
第43トレンチ	20×3.5	掘立柱建物跡の柱穴	須恵器・土師器
第44トレンチ	9.5×1	掘立柱建物跡の柱穴	須恵器・土師器・石器
第45トレンチ	13.5×2.3	掘立柱建物跡の柱穴	須恵器・土師器
第46トレンチ	5×1	—	—
第47トレンチ	11×1	掘立柱建物跡の柱穴	須恵器・土師器
第48トレンチ	12×1	掘立柱建物跡の柱穴	須恵器・土師器
第49トレンチ	12×1	掘立柱建物跡の柱穴	須恵器・土師器
第50トレンチ	5×1	—	—

図 版

(花原地区)



1. 第44区調査前全景（南より）



2. T・3 完掘状態（西より）



3. 第47区調査前全景（南より）

図版 2



1. T・4 完掘状態（南より）



2. T・5 完掘状態（東より）



3. T・6 完掘状態（東より）



4. 第51・52区調査前全景（西側斜面・東より）



1. T・10完掘状態（西より）



2. T・11完掘状態（西より）

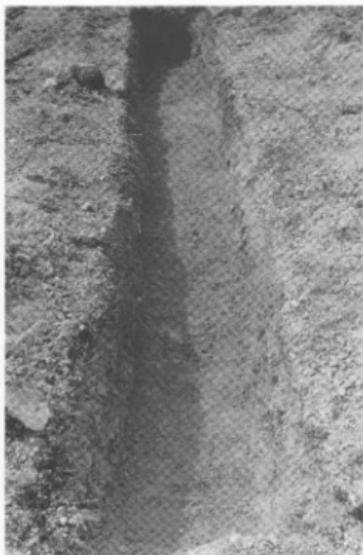


3. T・12完掘状態（西より）



4. T・13完掘状態（北より）

図版 4



1. T・14完掘状態（西より）



2. T・17完掘状態（西より）



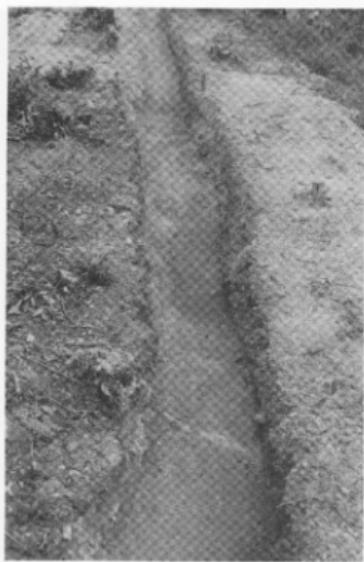
3. T・15完掘状態（東より）



1. T・18完掘状態（西より）



2. 第54区調査前全景（南側斜面・南より）



3. T・21完掘状態（南より）



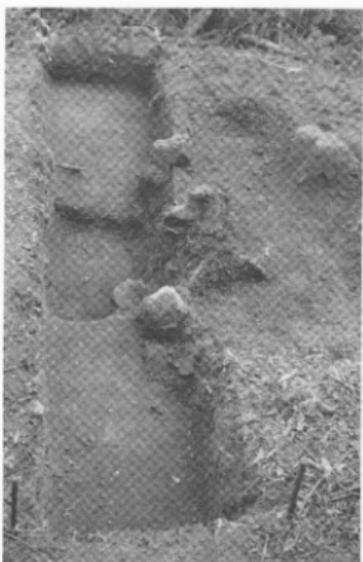
1. 第57区調査前全景（西より）



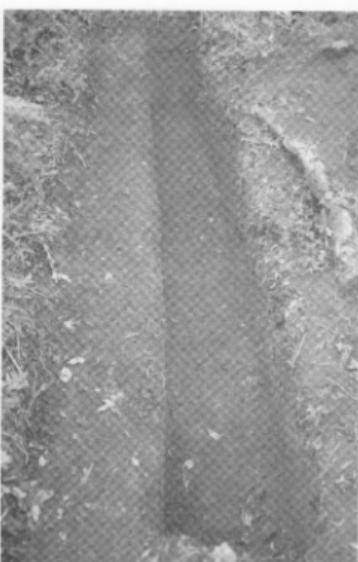
2. T・24完掘状態（北より）



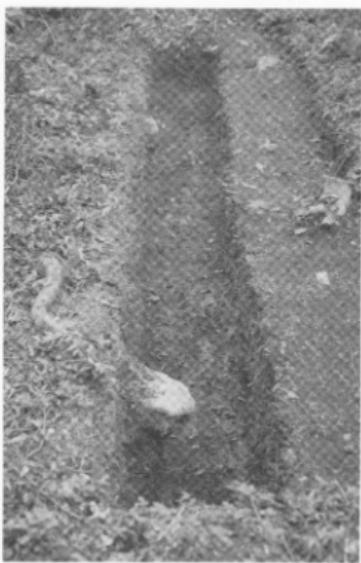
3. T・25完掘状態（北より）



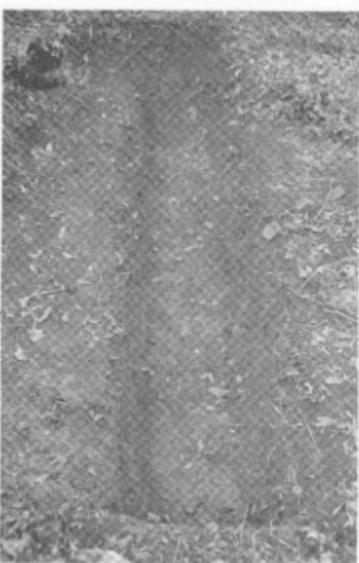
1. T・26完掘状態（北より）



2. T・27完掘状態（西より）



3. T・28完掘状態（北より）



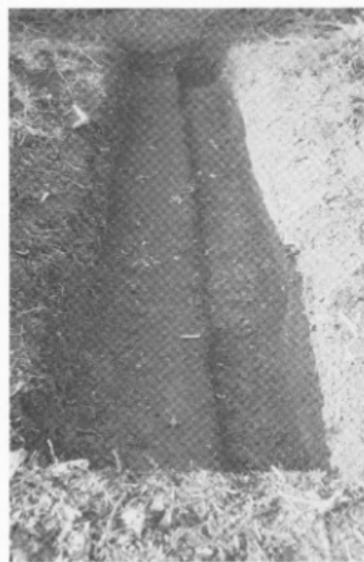
4. T・29完掘状態（西より）



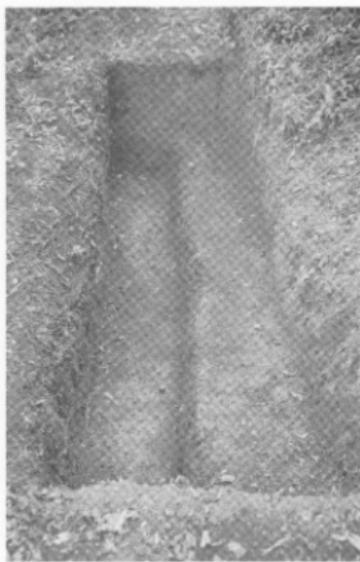
1. 第66区調査前全般（北より）



2. T・30完掘状態（北より）



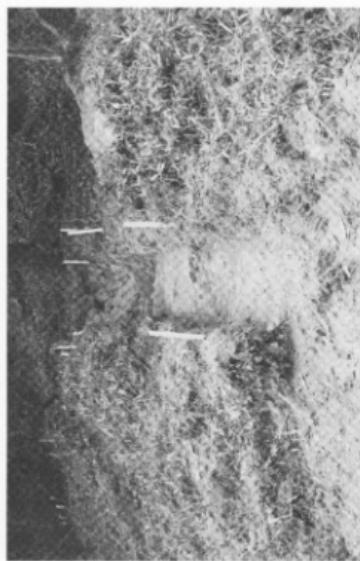
3. T・31完掘状態（南より）

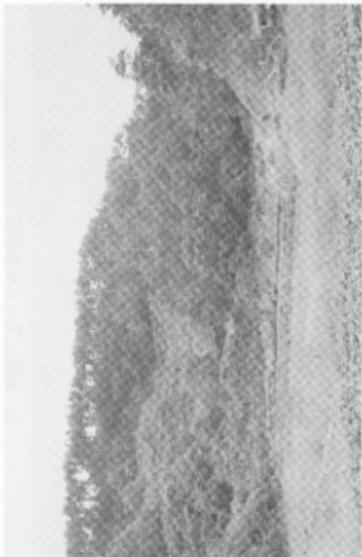


4. T・32完掘状態（南より）

図 版

(山ノ上地区)





1. B区遠景(東より)



2. C区遠景(東より)



3. B区、T・9周溝断面検出状態(南より)



4. B区、T・9周溝断面検出状態(東より)



1. D区、T・14周溝検出状態 (北東より)



2. D区、T・15周溝断面検出状態 (南東より)



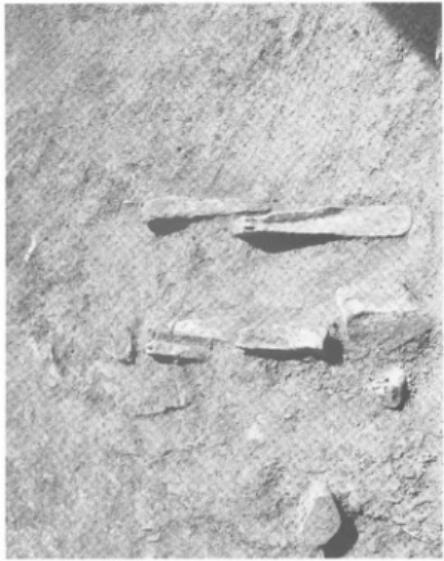
3. D区、T・16完掘状態 (北より)



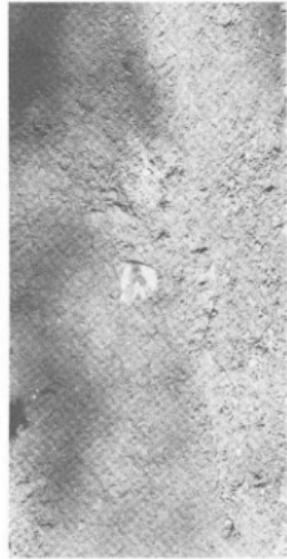
4. D区、T・16周溝断面検出状態 (東より)



1. E区、T・21~T・23全景 (北より)



3. E区、T23石棺出土状態 (西より)



4. E区、T21上器出土状態 (南より)



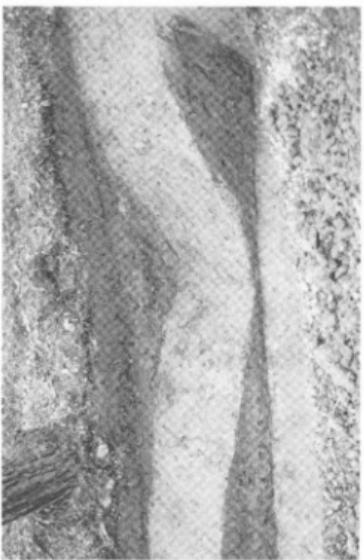
2. E区、T・21馬滑塗出状態 (東より)



1. F区、T・29周溝内土器出土状態（東より）



2. F区、T・29周溝内土器出土状態（北より）



3. H区、T・39周溝検出状態（西より）

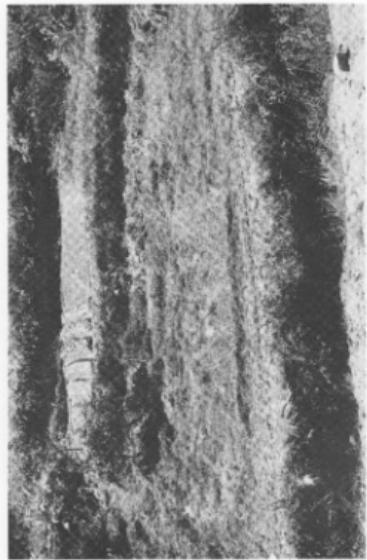
4. H区、T・39土坑 検出状態（西より）



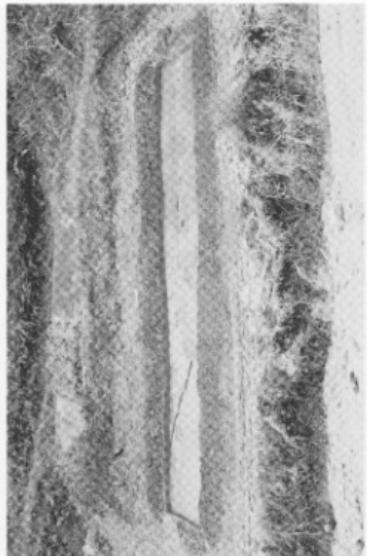
1. I区、T・40号穴住居状遺構検出状態（西より）



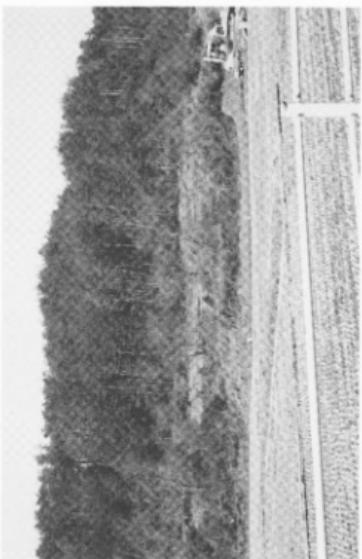
2. I区、T・40号穴住居状遺構検出状態（東より）



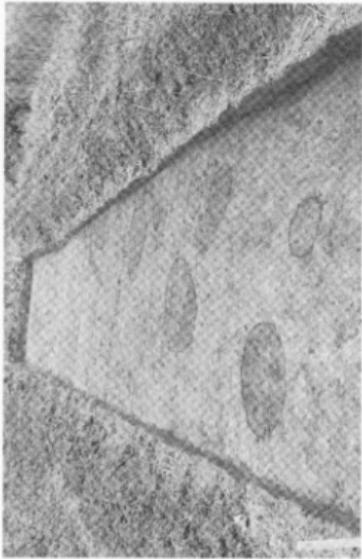
3. J区全景（北東より）



4. J区、T・43号掘状態（北東より）



1. K区遠景（東より）



2. K区、T・45柱穴検出状態（南より）



3. K区、T・45柱穴検出状態（北より）

作業員の皆さん

郡家町文化財報告書13

**花原遺跡群発掘調査報告書
山ノ上古墳群発掘調査報告書**

発行 1992・3

発行者 郡家町教育委員会
鳥取県八頭郡郡家町郡家493番地
TEL (0858) 72-0201 (代表)

印 刷 日 ノ 丸 印 刷 株 式 会 社
